

© The Tiffen Company, 2000

KODAK Color Control Patches

Kodak  
LICENSED PRODUCT

Blue

Cyan

Green

Yellow

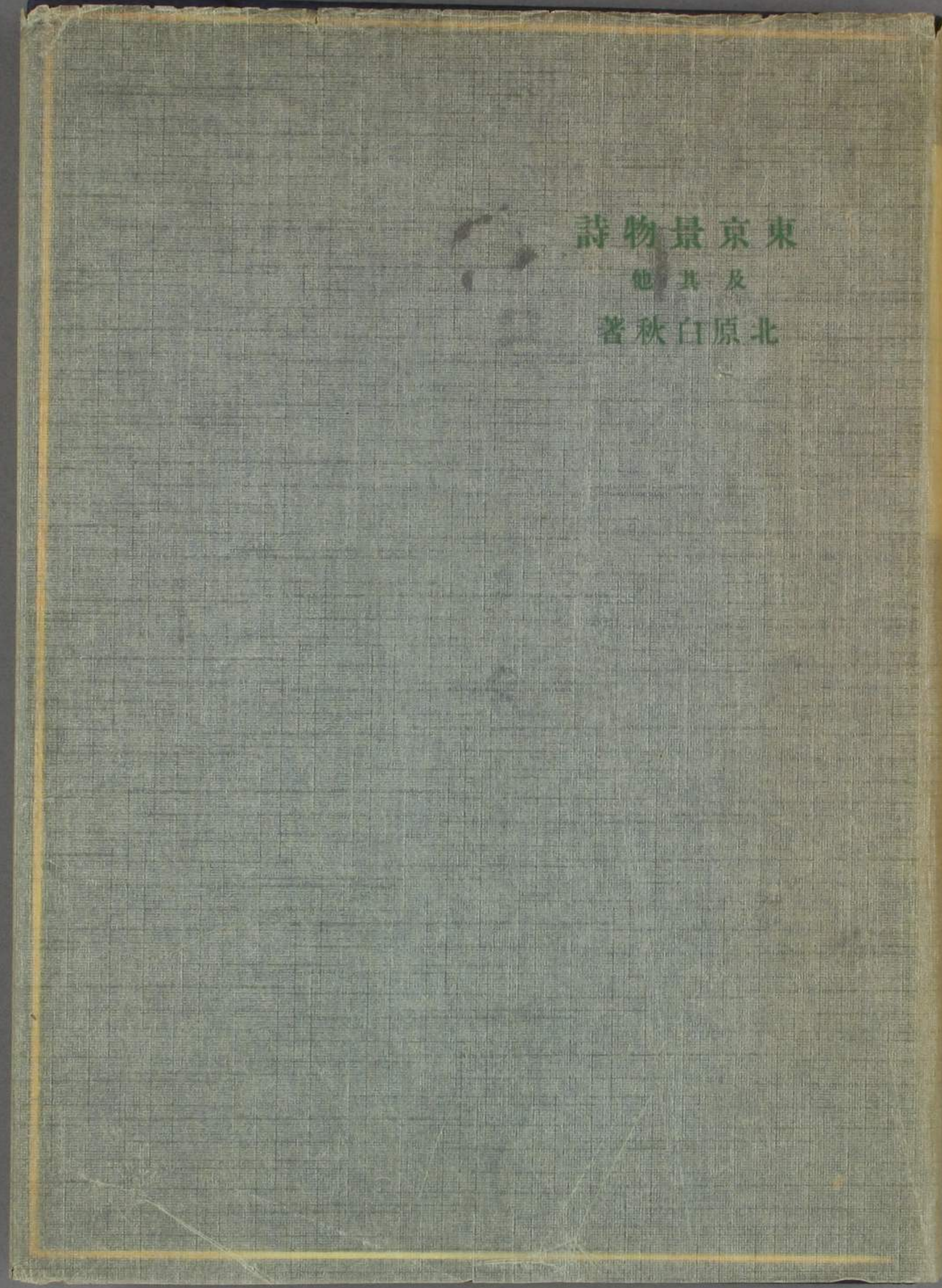
Red

Magenta

White

3/Color

Black



東 京 景 物 詩

地 其 及

著 秋 白 原 北

5

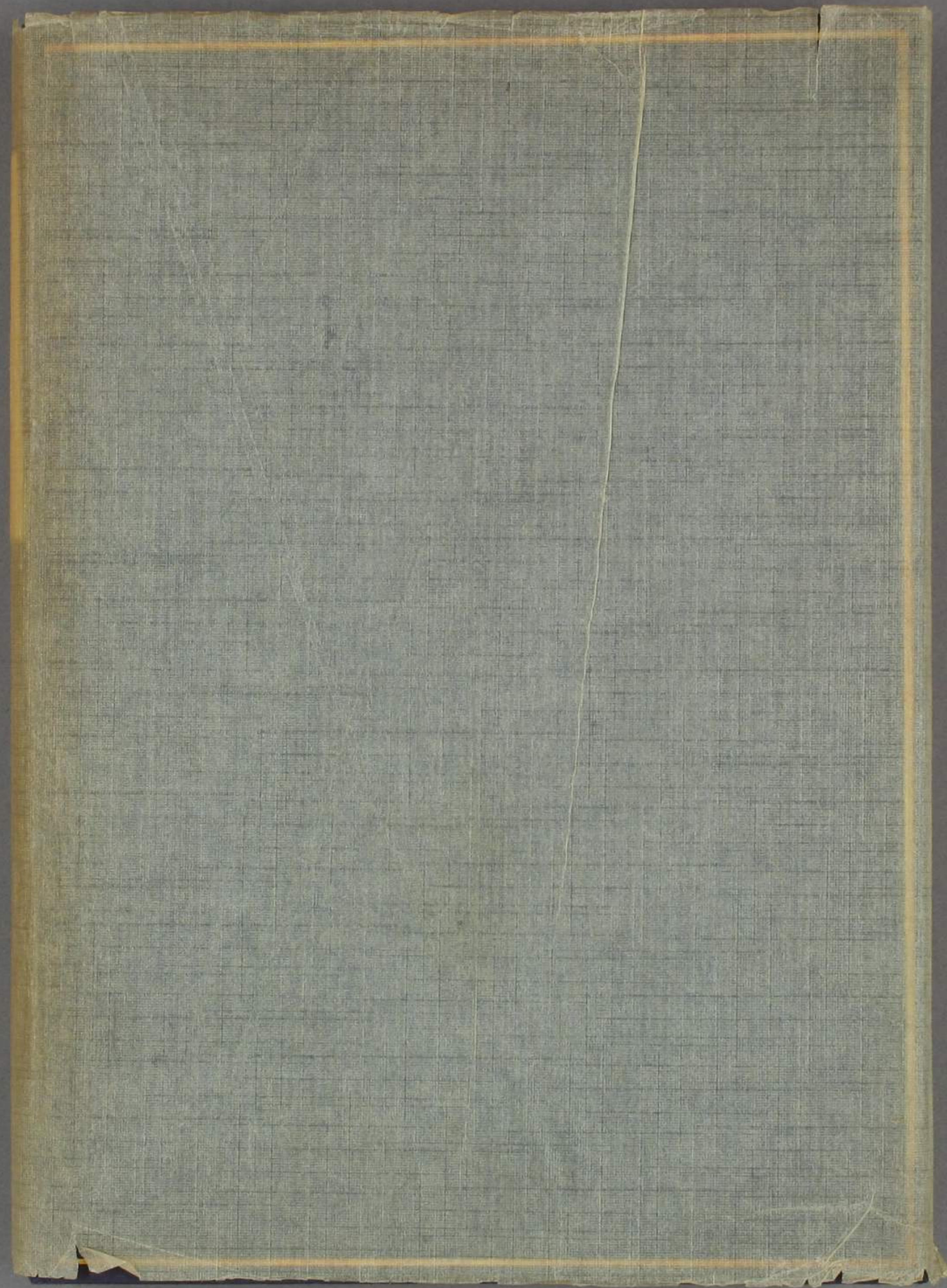
10

15

20

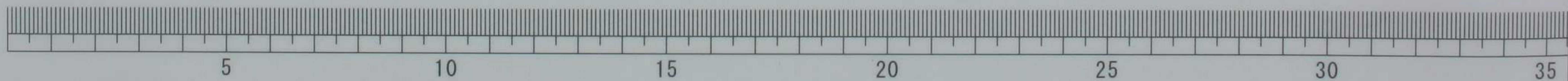
25

東京景物詩 及其他



東京景物詩  
及其他  
北原白秋著

東京景物詩  
及其他



5

10

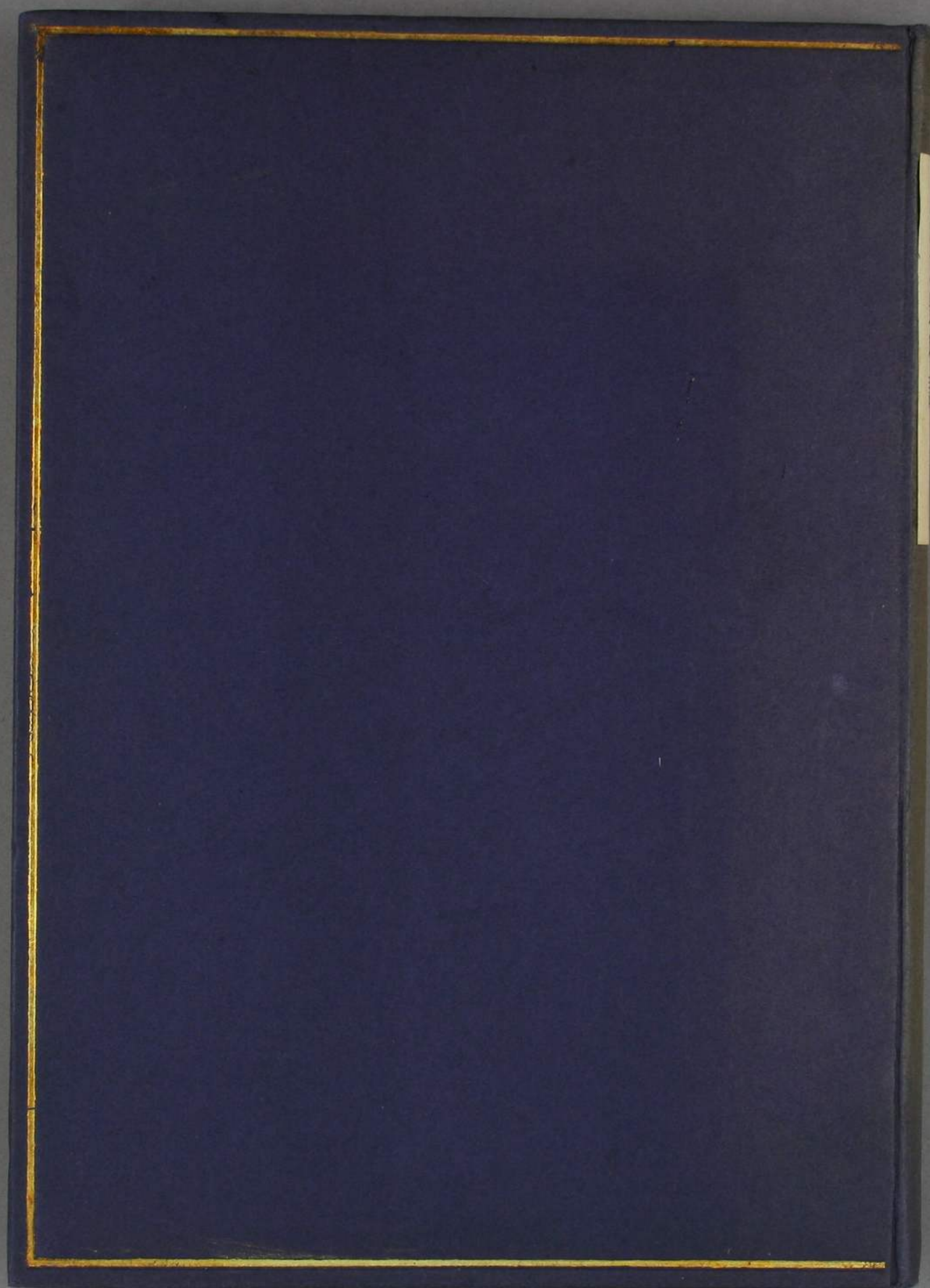
15

20

25

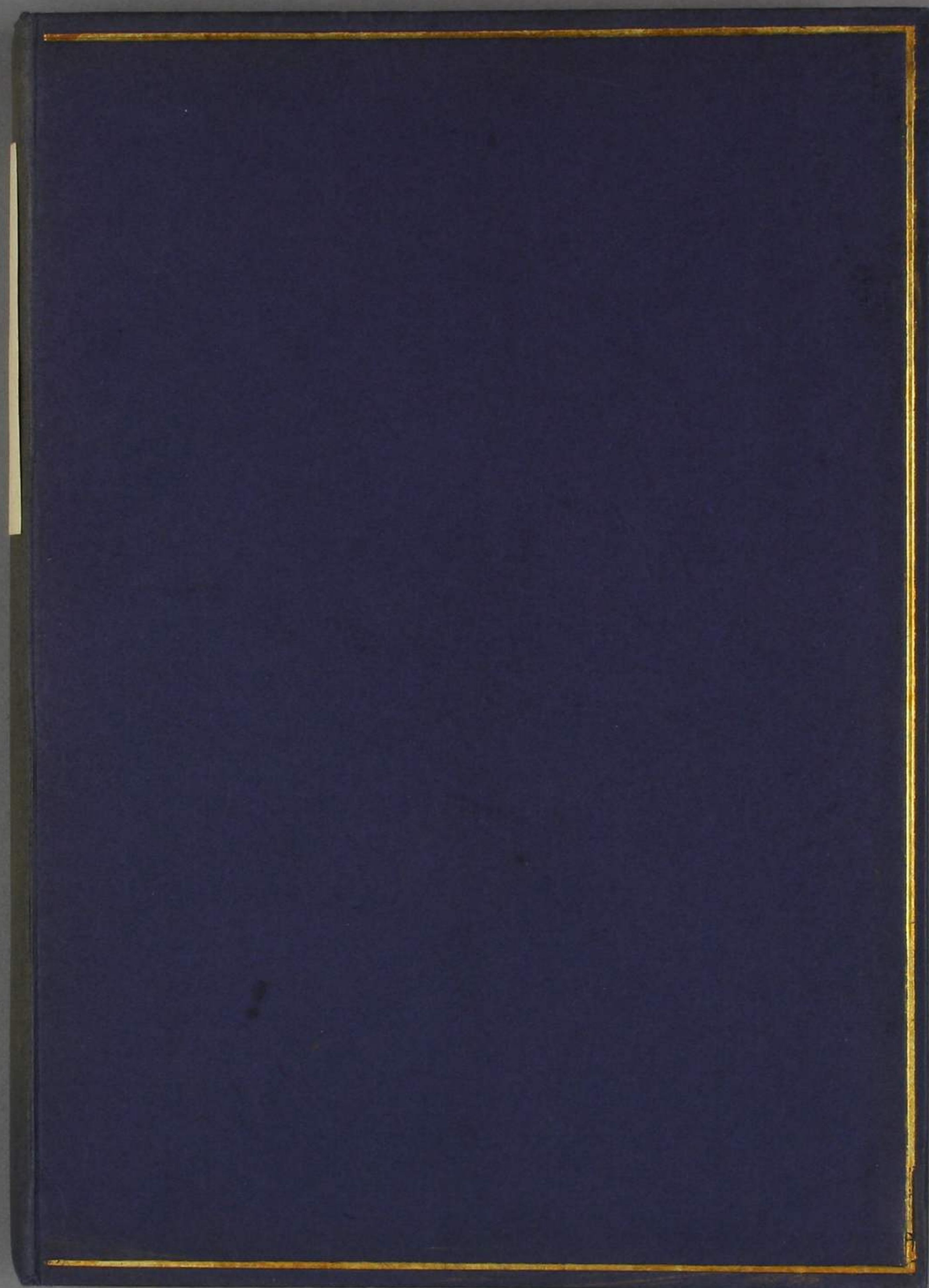
30

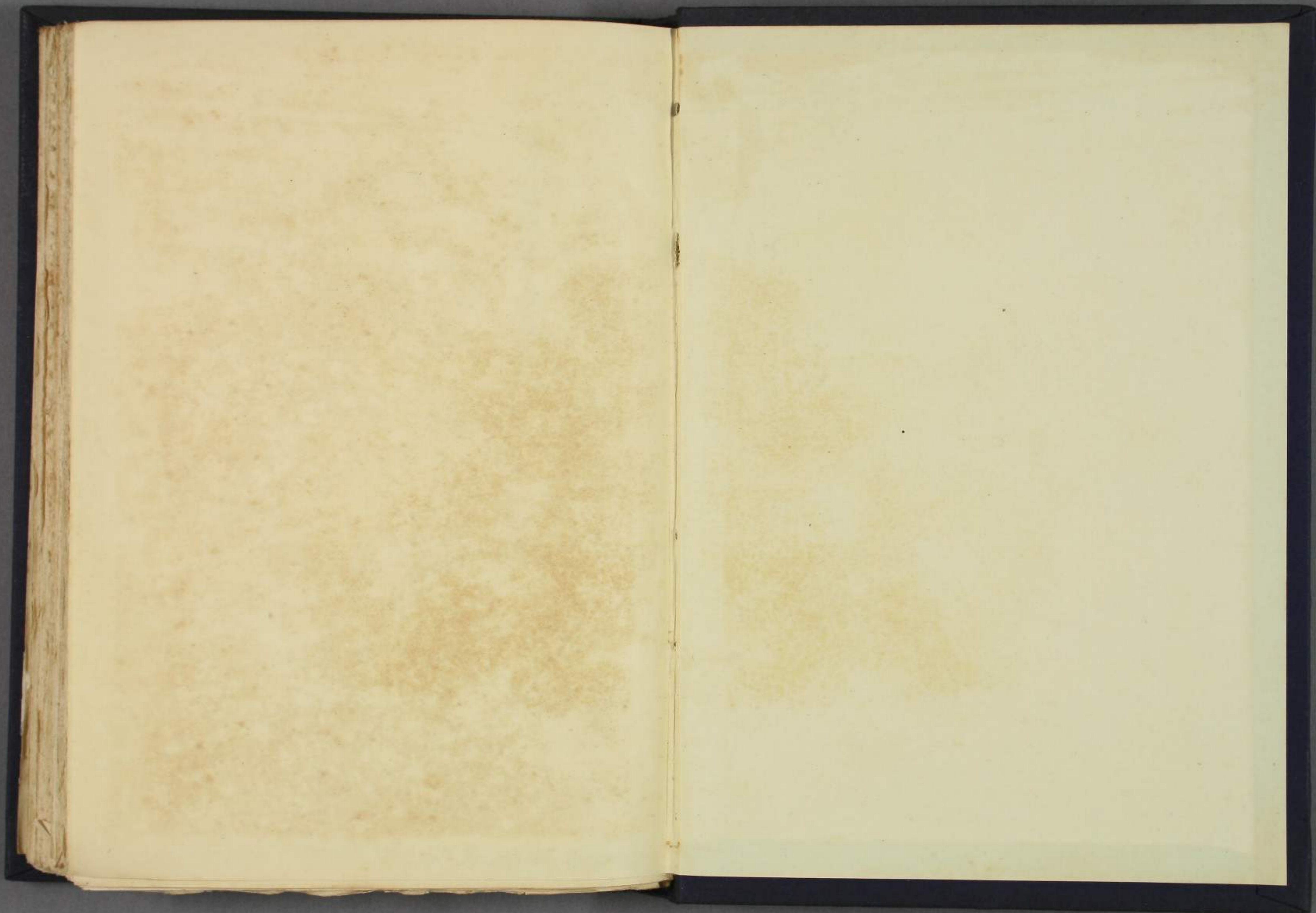
35



東京景物詩

及其他







東京景物詩  
及其他

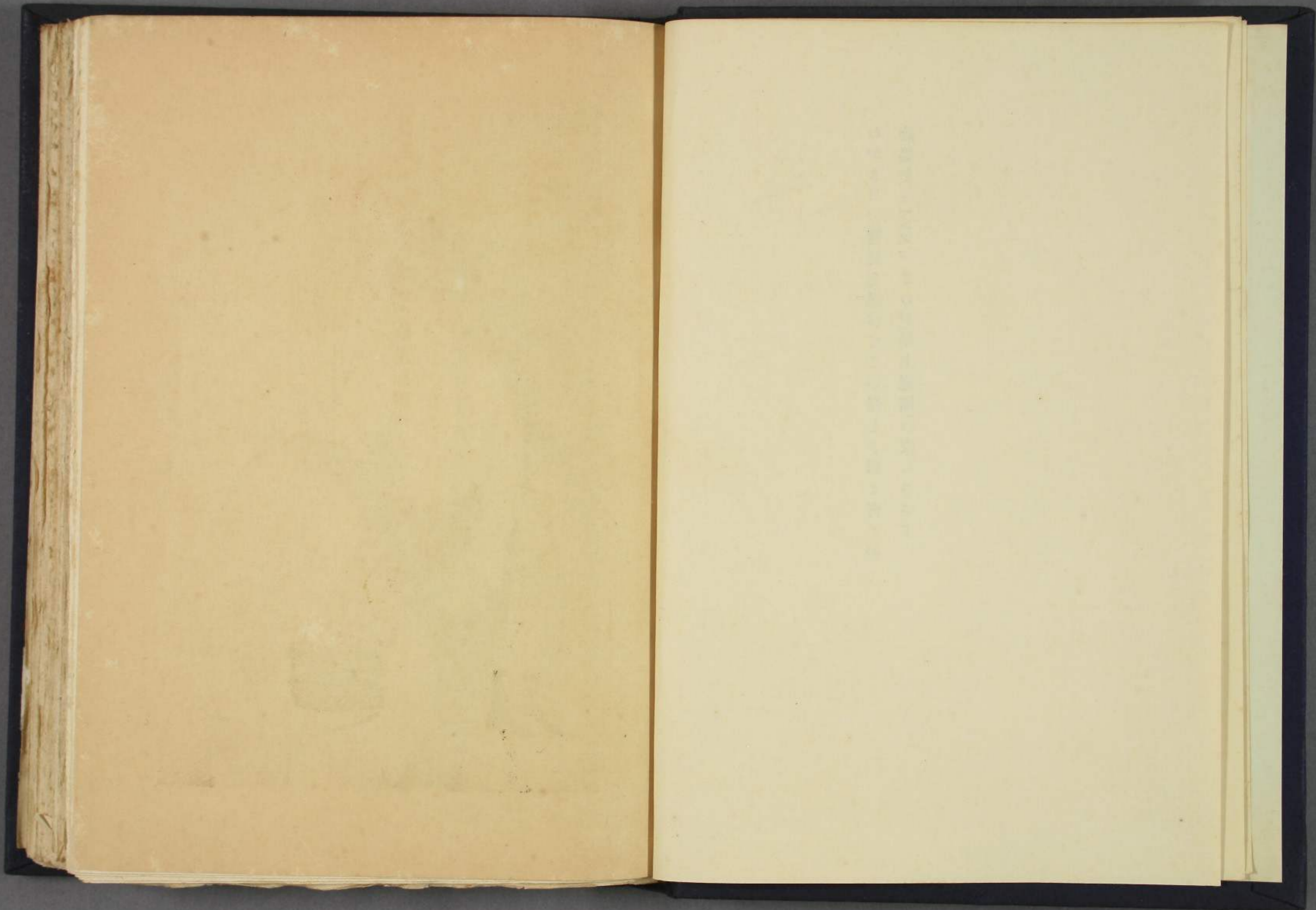
# 東京景物詩

及その他

北原白秋著及裝幀  
東京、東雲堂書店出版

東京景物詩

わかき日の饗宴を忍びてこの怪しき紺と青との  
詩集を「PAN」とわが「屋上庭園」の友にささぐ



東京夜曲



公園の薄暮

ほの青き銀色の空氣に、

そこそなく噴水の水はしたたり、

薄明ややしばしさまかえぬほど、

ふくらなる羽毛頸卷のいろなやましく女ゆき

かふ。

つつましき枯草の濕るにほひよ……

圓形に、あるは楕圓に、  
劃られし園の配置の黄にほめき、靄に三つ四つ  
色淡き紫の弧燈したしげに光うるほふ。

春はなほ見えねども、園のところに  
いと甘き沈丁の苦き苔の  
刺すがごと沁みきたり、瓦斯の薄黄は  
身を投げし靈のゆめのごと水のほとりに。

暮れかぬる電車のきしり……

凋れたる調和にぞ修道女の一人消えさり、  
裁判はてし控訴院に留守居らの點す燈は  
疲れたる硝子より弊私的里の瞳を放つ。

いづこにかすするげる春の暗示よ……

陰影のそここに、やや強く光劃りて

息ふかき弧燈枯くさの園に歎けば、

面黄なる病兒幽かに照らされて迷ひわづらふ。

朧げのつつましき匂のそらに、

なほ妙にしだれつつ噴水の吐息したたり、  
新しき月光の沈丁に沁みも冷ゆれば  
官能の薄らあかり銀笛の夜とぞなりぬる。

四十二年二月

鶯の歌

なやましき鶯のうたのしらべよ……  
ゆく春の水の上、露の廂合、  
凋れたる官能の、あるは、青みに、  
夜をこめて靈の音をのみぞ啼く。

鶯はなほも啼く……瓦斯の神經  
酸のごとく儻えて顫ふ薄き硝子に、



失<sup>うしな</sup>ひし戀の通<sup>つ</sup>夜、さりや、少<sup>せう</sup>女の  
青<sup>あお</sup>ざめて熟<sup>み</sup>視<sup>つ</sup>めつつ、開<sup>ひら</sup>くる腫<sup>はれ</sup>に。

憂<sup>ヒステリイ</sup>鬱<sup>症</sup>の靈<sup>たましひ</sup>の病<sup>や</sup>めるしらべよ……

コルタアの香<sup>か</sup>の屋根に、船のあかりに、  
朽<sup>く</sup>ちはてしおはぐるの毒<sup>どく</sup>の面<sup>おもて</sup>に  
愁<sup>おも</sup>ひつつ、にほひつつ、そこはかどなく。

井<sup>い</sup>オロンの三<sup>さん</sup>の絃<sup>いん</sup>摩<sup>ま</sup>るころか、  
ていほろと梭<sup>す</sup>の音<sup>おと</sup>たつるゆめにか、

寝<sup>ね</sup>ねもあへぬ鶯<sup>う</sup>のうたのそそりの  
か<sup>か</sup>つ遠<sup>とほ</sup>み、か<sup>か</sup>つ近<sup>ちか</sup>み、静<sup>しず</sup>ころなし。

夜もすがら夜もすがら歌<sup>うた</sup>ふ鶯……

月<sup>つき</sup>白<sup>しろ</sup>き芝<sup>しば</sup>居<sup>い</sup>裏<sup>うら</sup>、河<sup>が</sup>岸<sup>し</sup>の病<sup>や</sup>院、

なべて夜<sup>よ</sup>の疲<sup>つか</sup>れゆくゆめとあはせて、

ウキスラーアの靄<sup>うも</sup>の中<sup>なか</sup>音<sup>ね</sup>に鳴<sup>な</sup>き鳴<sup>な</sup>きてそこは  
かどなし。

四十二年一月

## 夜の官能

濕潤ふかき藍色の夜の暗さ……  
 酸のごとき星あかりさだかにはそれとわかぬ

濃く淡き溝渠の陰影に、

青白き胞衣會社のかにほひ、

窓多く、而もみな閉したる眞四角の煙艸工場  
 煙突の黒みより灰ばめる煤と湯氣なびきちら

ぼふ。

橋のもと、暗き沈黙に

舟はゆく……

なごやかにうち青む砥石の面を

いと重き刷刀の音もなく迂るごとくに、

舟はゆく……ゆげど聲なく

ありとしも見えわかぬ棹取の杞憂深げに、

ただ黄なる燈火ぞのぼりゆく……孤兒の頼り  
 なき眼か。

つつましき尿の香の滲み入るほどり、  
 腐れたる酒類の澱み濁りて  
 そここの下水よりなやみしみたり、  
 白粉と湯垢とのほめく闇にも  
 青き芽の春の草かすかにほふ。

濕潤ふかき藍色の夜の暗さ……  
 かへりみすれば  
 いと黒く、はた、遠き橋のいくつの

そのひとつ青うきしろひ、  
 神経の衰弱にぞ絶間なく電車過ぎゆき、  
 正面なる新橋の天鵝絨の空の深みに  
 さまざまの電気燈の裝飾、  
 そを脱けて紫の弧燈にほやかにひとつ濕れる。  
 あはれ、あはれ、爛壞のまへの官能のイルユミネ  
 エシヨン。

しかはあれども、  
 濕潤ふかき藍色の夜の暗さ……

溝渠ほりの闇やみの中病院うちびやういんの舟は消えゆき、  
 青白あざしろき胞衣えん會社くわいしゃにほふあたり、  
 整ととのはぬ鶯うすぞしみらにも鳴きいでにける。

四十二年三月

片戀

あかしやの金かねと赤あかとがちるぞえな。  
 かはたれの秋の光あかりにちるぞえな。  
 片戀かたこひの薄着うすぎのねるのわがうれひ  
 曳舟ひきふねの水みづのほとりをゆくころを。  
 やはらかな君きみが吐息といきのちるぞえな。  
 あかしやの金と赤とがちるぞえな。

四十二年十月

## 露臺

やはらかに浴みする女子のほひのごとく、  
 暮れてゆく、ほの白き露臺のなつかしきかな。  
 黄昏のどりあつめたる薄明  
 そのもろもろのせはしなきごよみのなかに、  
 汝は絶えず來る夜のよき香料をふりそそぐ。  
 また古き日のかなしみをふりそそぐ。

汝がもとに兩手をあてて眼病の少女はゆめみ、  
 爵金香くゆれるかげに忘れし人もささやく、  
 げに白き椅子の感觸はふたつなき夢のさかひ  
 に、  
 官能の甘き頸を捲きしむる悲愁の腕に似たり。

いつしかに、暮るとしもなき窓あかり、  
 七月の夜の銀座となりぬれば  
 静ころなく呼吸しつつ、柳のかげの  
 銀緑の瓦斯の點りに汝もまた優になまめく、

四輪車の馬の臭におひのただよひに黄なる夕月  
 もの甘き花はな梳くし子の薰くゆしてふりもそそげば、  
 病める兒のころもとなきハモニカも物モノ語ゴトの  
 なかに起りぬ。

四十二年七月

## S 組合の白痴

雑艸園

惱ましき黄の妄想の光線と、生物の冷き愁と、  
— 靈の雑艸園の白日はかぎりなく傷ましきかな。  
たとふればマラリヤの病室にふりそそがれし  
香水と消毒劑と、……窓の外なる蜜蜂の巢と、  
そのなかに絶えず恐るる弊私的里の看護婦の  
眼と、  
霖雨後の黄なる光を浴びて蒸す四時過ぎの歎

に似たり。

見よ、かかる日の眞晝にして  
氣遣はしげに黠りたる瓦斯の火の病める腫よ。

かくてまた踏み入りがたき雑艸の最も淫れし

あるものは

肥満りたる、頸輪をはづす主婦の腋臭の如く蒸

し暑く、

悲しき莖のひと花のぺんぺん草に絶りしは、

薬瓶もちて休息める雑種兒の公園の眼をおも

はしむ。

また、緩やかに夢見るごときあるものは、

午後二時ごろの Café じ Verlainne のあるごとき、

ことにくきは日光が等閑になすりつけたる

思ひもかけぬ、物かげの新しき土の色調。

またある草は白猫の柔毛の感じ忘れがたく、

いとふくよかに温臭き残香の中に吐息しつ。

石鹼の泡に似て小さく、簇り青むある花は

ひと浴みし肺病の女の肌を忍ぶごとき、



洋妾<sup>らしやめん</sup>ゆける雁<sup>げ</sup>來<sup>こ</sup>紅<sup>こう</sup>は

吸<sup>く</sup>ひさしの巻煙草<sup>まきえんそう</sup>めきちらばひてしみらに薰<sup>く</sup>

ゆる

朝顔<sup>あさご</sup>の萎<sup>しほ</sup>みてちりし日かげをば見て見ぬごと  
し。

見よ、かかる日の眞晝<sup>まひる</sup>にして

氣遣<sup>きぢ</sup>はしげに瞬<sup>またた</sup>ける瓦斯<sup>わす</sup>の火の病める腫<sup>はれ</sup>よ。

あるものは葱<sup>ねぎ</sup>の畑より忍<sup>しの</sup>び來<sup>き</sup>し下男<sup>しもや</sup>のごとく、

またあるものは轢<sup>は</sup>かれむとして助かりし公證<sup>こうじやう</sup>

人の女房<sup>にようぼう</sup>が

甘蔗<sup>かんざ</sup>のなかに青ざめて佇<sup>た</sup>むごとき匂<sup>にお</sup>しつ。

ことに正しきあるものはかかる眞晝<sup>まひる</sup>を

儼<sup>げん</sup>え自らみたる烏屋<sup>くわ</sup>の外に交<sup>ま</sup>接<sup>せつ</sup>へる鶏<sup>とり</sup>をうち

目守<sup>めもり</sup>る。

噫<sup>あゝ</sup>、かかるもろもろの匂<sup>にお</sup>のなかにありて

藥草<sup>やくそう</sup>の香<sup>か</sup>はひごしほに傷<sup>いた</sup>ましきかな、

哀<sup>あは</sup>れ、そは三十路<sup>そじろ</sup>女<sup>をんな</sup>の面<sup>おも</sup>もちのなにどなく淋<sup>しみ</sup>し

きごどく、  
活動寫眞の小屋にありて悲しき銀笛の音の消  
ゆるに似たり。

見よ、かかる日の眞晝にして  
氣遣はしげに黄ばみゆく瓦斯の火の病める瞳  
よ。

あはれ、また  
知らぬ間に懶きやからはびこりぬ。

ここにこそ恐怖はひそめ。かくてただ盲人の

親は寝そべり、

剃刀持てる白痴兒は匍匐ひながら、

こぼれたる牛乳の上を、毛氈を、近づき來る思あ  
り。

またその傍に、なにとも知れぬ匂して、

詮すべもなく降りゆく、さあれ楽しくおもしろ  
き

やぶれかかりし風船の籠に身を置く心あり。

あるは、また、かげの濕地に精液のにほひを放つ

草もあり。

見よ、かかる日の眞晝にして

氣遣しげに青ざめし瓦斯の火の病める瞳よ。

惱ましき黄の妄想の光線と、生物の冷き愁と、

霊たましひの雑艸園の白日けいじつの聲もなきかがやかしさを、

時をおき、揺り轟かし、黒烟くろけんたたきつけつつ、

汽車飛び過ぎぬ、かくてまたなにごともなし……。

四十二年十月

## 瞰望

わが瞰望は

ありとあらゆる悲愁かなしみの外に立ちて、

東京の午後四時過ぎの日光と色と音とを怖れ  
たり。

七月の白き眞晝、

空氣の汚穢けがれうち見るからにあさましく、

いと低き瓦の屋根の一圓は卑怯に鈍く黄ばみ  
たれ、

あかあかど屋上園に花置くは雑貨の店か、

(新嘉坡の土の香は莫大小の香さうち咽ぶ。)

また、青ざめし羽目板の安料理屋の窓の内、

ただ力なく、女は頸かたむけて髪梳る。

(私生兒の泣く聲は野菜とハムにかき消さる。)

洗濯屋の下女はその時に物干の段をのぼり了

り、

男のにほひ忍びつつ、いろいろのシャツをひろ

げたり。

九段下より神田へ出づる大路には  
しきりに急ぐ電車をば四十女の酔人の來て止  
めたり。

斜かひに光りしは童貞の帽子の角か。

かかる間も收まり難き困憊はとりとめもなく  
うち歎く。

その濕めらへる聲の中

霸王樹サキボクの蔭カゲに蹲うづくみて日向ひなたぼこせる洋館ヨウカンの病兒びやうじ  
の如く泣くもあり。

煙艸工場エンソウコウジョウの煙突エンツツ掃除ソウジのくるんぼが通行人ツウジンを罵ののし  
る如き聲こゑもあり。

白晝ハクジツを按摩アツマシの小笛コフエ、

午睡ナンシのあとの倦怠けんたいさに雪駄せつだものうく

白粉オシロイやけの素顔すゝかほして湯ゆにゆくさまの藝妓げいぎあり。

交番カウバンに巡査ジュンサの電話でんわ、

廣告コウゴの道化みちわうち青みつつ火事場カシバへ急いそぐごとき  
あり。

また間まの抜ぬけて淫みだららなる支那學生シナガクシのさへづり

は

氷室ヒツムの看板かんばんかけるペンキペンキのはこび眺ながむること  
く、

印刷インソクの音ねの中なか、色赤いろあかき草花くさな凋しなえ、

ほごちかき外科病院ゲカビョウインの裏手うらての路次ろじの門かど彈びきは

げにいかかはしき病びやうの臭氣くさけこもりたり。

(いま妄想マウゾウの疲れつかれより、ふと起たりたる

藥種屋内ヤクシュウヤノウチの人殺ひところし、

下手人は色白き去勢者の母。

何かは知らず、

人かげ絶えてただ白き裏神保町の眼路遠く、

肺病の皮膚青白き洋館の前を疲れつつ、

「刹那」の如く横ざりし電車の胴の白色は一瞬にして隠れたり。

いたづらに玩弄品の如き劇場の壁薄あかく、

ところどころの窓の色、曇れる、あるはやや黄なる、

弊私的里性の薄青き、あるは閉せる、

見るからに温室の如き寫真屋に晝の瓦斯つき、

(亡き人おもふ哀愁はそこより来る。)

獣醫の家は家畜の毛もていろごられ、

齒科病院の帷は入齒のごとき色したり、

その真中にただひとつ、研ぎすましたる悲愁か、

冷き理髪の二階より、

剃刀の如く閃々と銀の光は瞬けり。

あらゆるものの疲れたる七月の午後、

わが瞰望の凡ての色と音と光を壓すごとく、  
 凡ての上のうち顯る「東京の青白き墳墓」  
 ニコライ堂の内秘より、薄闇き圓頂閣を越えて  
 大釣鐘は騒がしく靈の内と外とに鳴り響く。  
 鳴り響く、鳴り響く、……

四十二年十月

## 心こそその周圍

### I 窓のそこ

1

わが窓のそこ、  
 黄なる實のおよんごんのちまめは小さな光  
 の簇をつくり、  
 葉かげの水面は銀色の静寂を織る。

白くして惱める眼鏡橋のうへを  
 鐵輪を走らしつつ外科醫院の兒は過ぎゆき、  
 氣の狂ひたる助祭は言葉なく歩み來る。

鐘を撞け、鐘を撞け、

恐ろしき銀色の鐘を……

この時、近郊を殺戮したる白人の一揆は  
 更にこの静かにして小さな心の領内を犯さ  
 んとし、

すでにその鎗尖のかがやきはかなたの丘の上  
 に閃めけり。

正午過ぎ……一分……二分……三分……

日は光り、そよとの風もなし。

2

ある日、わが窓の硝子のしたに、  
 覆されたる蜜蜂の大きな巣、激しく臭ひ、  
 その周圍に數かぎりなき蜂の群音たてて光り



かがやき、  
粗末なる木の函へすべり入り、匍ひめぐる。  
かがやかしき歡喜と悲哀！  
すべてこの銀色の光のなかに  
太くしてむくつけき黒人の手ぞ  
働ける……甘き甘きあるものを搔きいださん  
とするがごとく。

その前に負傷したる敵兵三人、  
あるものは白き布にて右の腕を吊したり――

日に焼けたる絶望の顔をよせて  
そこはかどなきかかる日の郷愁に惱むがごと  
く  
珍かにうち眺めたる……足もとの黄色なる花  
濕りたる土の香のさみしさに晷りつつうち凋  
る。

鐘は鳴る……銀色の教會の鐘……

硝子窓のなかには

薄色の青き眼がねをかけたる女、  
 かりそめのなやみにほつれたる髪かきあげて、  
 薬罐載せたる圓卓のはしに肱つきながら  
 金字見ゆるダンスンチオの稗史を閉し、  
 静かなる杏仁水のほひにしみじみときき惚  
 れてあり。

ああ午後三時の郷愁……

## II S組合の白痴

夕まぐれ、石油問屋のS組合の入口に、  
 つめたき硝子戸のそと、  
 うち潤る石油色の影陰の中、薄ら光る銀の引手  
 のそばに  
 薄白痴のわかきニキタは紫の絹ハンケチを頸  
 にむすび、  
 今日もまたのんびりだらりと立ん坊の河岸の  
 便所に凭るるごとく、

のろまな  
その鈍き容態のいづこにか猜き眼を働らかせ  
にやにやと笑ひつつあり。

日は向う河岸の家畜病院の頽れたる露臺を染  
め、

入口の硝子戸の前に薬塗らるる色黄なる狂犬  
を染め、

隣れる健胃固腸丸の廣告に苦き光を残しつつ  
沈みゆく。

S 組合の薄白痴は  
石油ににじむ赤き髪に雑種兒の矜を思ひ、  
けふの夜食も焼パンにジャムと牛乳を購はん  
とぞ思ふ。

かかる間も白銅のこひしさに  
通りすがる肥満女の葱もてる腕に寄りてうち  
挑む。

薄暮の河岸のあかしや、二本の河岸のあかしや、  
その葉のゆめの金絲雀のごとくに散るころを、

またしてもくちすさむ、下品なる港街の小唄。  
青き青き溝渠の光は暮れてゆく……

わかきニキタはぼんやりと薄笑しつつ……

十月の枯草の黄なるかがやき、そがかげのあひ

びきの

浮つきし聲のかすれを思ひいで、

また外光の紫に河岸の燕の飛び翔りながら隙

見する

瞳青きフランス酒場の淫れ女が湯浴のさまを

思ひやり、

あるはまた火事ありし日の夕日のあたる草土

堤に

だらしなく擁へ出されて薫りたる淡黄の、赤の

乳緑の、青の、沃土の、

催笑劑や泣薬、痲痺劑や惚薬、そのいろいろの音

樂の囀。

さて組合の禿頭のトムソンが赤つちやけたる

鹿爪らしき古外套をかしがり、

恐ろしかりし夏の日のこと、ごくだみの臭き花

のなかに

「キ……ン……タ……マ……が……い……た……い……」

白粉厚き皺づらに力なく啜り泣きつつ、  
終に斃れし旅藝人のかつぽれが臨終の道化姿

ぞ目に浮ぶ。

今瓦斯點きし入口の撻押しあけて

石油の臭新らしく人は去る、流行の背廣の身が  
るさよ。

いつしかに日は暮れて河岸のあなたはキネオ

ラマのごとく燈點き、

吊橋の見ゆるあたり黄なる月嚙曉と音も高く

出でんとすれど、

あはれなほS組合の薄白痴のらちもなき想は  
つづく……

## III 泣きこゑ

わが寝ねたる心となり泣くものあり――  
 夜を一、夜、乳をさがす赤子のごとく

光れる釣鐘草のなかに頬をうづめたる病兒の  
 ごとく、

あるものは「京終」の停車場のサンドウキツチの  
 呼びこゑのごとく、

黄にかがやける枯草の野を幌なき馬車に乗り  
 て、

密通したる女のただ一人夫の家に歸るがごと  
 く、

げにげにあるものは大蒜の畑に狂人の笑へる  
 ごとく、

「三十三間堂」のお柳にもまして泣くこゑは、

ネル着けてランプを點す横顔のやはらかき涙  
 にまじり

理髮器の銀色ぞやるせなき囚人の頭に動く。

そのなかに肥満りたる古寡婦の豚ぬすまれし  
 驚駭ご、

窓外の日光を見て四十男の神官が  
死のまへに啜泣せるつやもなく怖しきこゑ。

ああ夜を一夜、

わが寝たる心となり泣くものうれひよ。

#### IV 銀色の背景

わが悲哀の背景は銀色なり。

そは五月の葱畑のごとく、

夏の夜の「若竹」の銀襖のごとく青白き瓦斯に光  
る。

そのまへに、――

弊私的里の甚しきは

私通したる泊芙藍色の女の

聲もなき白痴の兒をば抱きながら入日を見る  
 がごとくに歩み、

かの苦く青くかなしき愁夜曲……

ある夜のわれは恐ろしくして美しき竹本小土

佐の

「合邦」の玉手御前の悲歎をば彈語する風情に坐  
 り、

暗き暗き鬱悶は

鈍銀の引かれゆく幕の前に、指組める「仁木」のご  
 とく

隈青き眼の光烟とともにスツポンの深き恐怖  
 よりせりあがる。……

何時も何時もわが悲哀の背景には銀色の密境  
 ぞ住む。

そのなかに鳴きしきる蟲の音よ、

句高き空氣の迅き顫動、

太棹と、鋭き拍子木、

ああああわが凡の官能は盲ひんとして静かに  
 光る。



## V 神経の凝視

日は暮るる、日は暮るる、力なき鬱金の光……

ゆき馴れし一本の楡のもと、半壊れし長椅子に、  
恐ろしき病室を抜けいでたるわがこころの  
神経の疑ふかき凝視……

足もとの、そここの小さき花は  
長く長く抱擁したるあとの黄色なる興奮に似

て

光り……なげき……吐息し……

沈黙したる風は

生前の日の遺言状の秘密のごとくに刺草の間

に沈み、

美しき絶望のごとたまさかに蜥蜴過ぎゆく。

近郊の鐘は鳴る……修道院晚餐の鐘……

神経の澄みわたる凝視はつづく——

その青くして何物にも吸ひ取らるるがごとき  
瞳は

身をすりよする異母妹の性の恐怖より逃れん  
とし、

親しき友人の顔に陋しき探偵の笑を恐れ、

色黄なる醜き悪縁の女を殺さんとし、

さらにわが生を力あらしめんがために砒素を

醫局の棚より盗み、

終にまた響も立てぬ靈の深緑の瞳にうち吸は  
れ、

わが心の深淵に突き落されし處女の銀の咽び  
をきく。

この時、病院の青白き裏口の戸に佇める看護婦  
は

携へし鳥籠の青き小鳥の鳴くこゑをさびし  
みながら、

角吹ける乗合馬車の遠き遠き黄のかがやきを  
なつかしむ。

日は暮るる、日は暮るる、ちから力なき鬱金の光……

四十三年二月

### 物理學校裏

Borun, Bromun, Calcium.

Chromium, Manganum, Kalium, Phosphor.

Barium, Iodium, Hydrogenium.

Sulphur, Chlorum, Strontium,……

(寂しい聲がきこえる、そして不思議な……)

日が暮れた、あざ淡い銀と紫——

蒸し暑い六月の空に  
 暮れのこる棕櫚の花の惱ましさを。  
 黄色い、新しい花穂の聚團が  
 暗い裂けた葉の陰影から噎せる如に光る。  
 さうして深い吐息と腋臭とを放つ  
 齒痛の色の黄、沃土ホルムの黄、粉っぽい亢奮の  
 黄。



蒼白い白熱瓦斯の情調が曇硝子を透して流れ

る。

角窓のそのひとつの内部に  
 光のない青いメタンの焰が燃えてるらしい。  
 肺病院の如な東京物理學校の淡い青灰色の壁  
 に  
 いつしかあるかなきかの月光がしたるる。

Tin.....tin.....tin.n.n.....tin.n.....

tire.....tire.....tin.n.n.n.....syn.....

t.....t.....t.....t.....tote.....tsn.n.....syn.n.n.n.....

静かな惱ましい晩、  
 何處かにお稽古の琴の音がきこえて、  
 崖下の小さい平家の亜鉛屋根に  
 コルタアが青く光り、  
 柔らかい草いきれの底に Lamp の黄色い赤みが  
 點る。

その上の、見よ、すこしばかりの空地には  
 湿った胡瓜と茄子の鄙びた新らしい臭が  
 惶ただしい市街生活の哀愁に纏れる……

汽笛が鳴る……四谷を出た汽車の Cadence が近  
 づく……

暮れ悩む官能の棕櫚  
 そのわかかわかしい花穂の臭が暗みながら噓ぶ、  
 齒痛の色の黄、沃土ホルムの黄、粉っぽい亢奮の  
 黄。

寂しい冷たい教師の聲がきこえる、そして不可  
 思議な……

そここの明るい角窓のなかから。

Sin.....;Cosin.....;Tan.....;Cotan.....;Sec.....;Cosec.....  
etc.....

Ion. Dynamo. Roentgen. Boyle. Newton.

Lens. Siphon. Spectrum. Tesla の火花

攝氏、華氏、光、Bunsen. Potential. or, Archimedes. etc, etc.....

棕櫚のかげには野菜の露にこほろぎが鳴き、

無意味な琴の音の稚なびた Sentiment は

何時までも何時までもせうことなしに續いて  
ゆく。

汽笛が鳴る………濠端の淡い銀と紫との空に  
停車つた汽車が蒼みがかつた白い湯氣を吐い  
てゐる。

静かな三分間。

惱ましい棕櫚の花の官能に、今、

蒸し暑い魔睡がもつれ、

暗い裂けた葉の縁から銀の憂鬱がしたたる。

その陰影の捕促へがたき Passion の色、

齒痛の色の黄、沃土ホルムの黄、粉つばい亢奮の黄。

Neon. Flourum. Magnesium.

Natrium. Silicium. Oxygenium.

Nitrogenium. Cadmium or, Sibirium

etc., etc.:.....

四十三年三月

骨なし兒と黒猫

そは恐ろしきXなり。淫らにして不倫なる母のごとく、

汝が神経と知覚とは痛ましきほど慄けごも、力なき骨なし兒よ。

終日、わづらはしき病室の白葡萄酒の如き空気に呼吸し、

靈のうつらぬ瞳は唯狂はしき硝子戸の外をう

ち凝視む。

そが背後の棚の上、やや青みたる陰影の中、  
ニツケルの産科の器械、鷺のごとき嘴して光り、  
薄く曇れる硝子のなかにとりあつめたる薬剤  
の饅、  
その青く赤くおほめける劇薬のエチケツテ……  
鋭く、苦し。

ああ骨なし兒よ。この薄暮の反射に、

柔軟かにして惱ましき汝が衾は銀の潤澤に光  
れど、

冷やかなる鐵の寢臺の上、据ゑられし木造の函  
は、

汝が身を入れたる小さき牢獄は山葵色の曇に  
うち歎く。

大人びたる顔の白き白き白粉の恐ろしさよ。

なよなよと凭せたる身體のしまりなさ。

靈の青さ、いたましさ、



生なま温ぬるき風かぜのごと骨ほねもなき手ては動うごく——その空そらに  
 鏽銀しやうぎんの鐘かねはかかれり。

あ、あ、あ、今いましがたまでぞ、この硝子がら戸すの外そとには  
 五時ごじごろの日の光ひかりわかかわかしき血ちのごとくふ  
 りそそぎ、

見みえざる窓まど下したのあたりより、  
 抑おさえあへぬ抱擁はうようの笑わらひ聲こゑきこえしか——葱畑ねぎはたけ  
 すでに青あをし。

鏽銀しやうぎんの鐘かねよりは一條ひきの絹薄きぬうす青あをく下さりて光ひかる。

その端はしをはづかに取りたる手ては、その腫はれは、  
 ああ、すべて力ちからなし。——さらにさらに痛いたましき  
 はかかる青あをき薄暮うすぐたの激げきしき官能くわんのうの刺戟しげき。

聴きけ、遂つひに、彼かれは泣なく。……

あらず、そは馴染なじみたる黒猫くろねこなりき。ふくらなる  
 身みを跳おとらせて、

銀色ぎんしよくの衾ふすまの裾すそにのぼりつつ背せを高たかめたる。  
 黄きばみたる青葱色あせいろの眼めの光ひかり來きたる夜よの恐怖おそれにそ

そぐ

かくてただ聲もなし。青く光る硝子戸に眞白

なる顔ふりむけて、

哀樂の表情もなく親しげに畜類の眼と並びつ

つ何をか凝視む。

ああ、暗き暗き葱畑の地平に黄なる月いでんと

して、

鏽銀の鐘は鳴る……幽かに……幽かに……や

るせなき靈の求めもあへぬ郷愁。

四十三年二月

雪ふる夜のこころもち

今夜も雪が降つてゐる。……

Blue devils 40

酔ひ狂つた俺の神経が――

Sara……sara……こふる雪の幽かな瞬を聴きわける

ほご――

ひつそりと怖気づく、ほんの一時の氣紛につけ

込んで、

汝はやつて来る……顫ひながら例の房のつい

た尖帽をかぶつて、

掻きむしつた亞麻色の髪、泣き出しさうな青

い面つきで、

ふらふらと浮いた腰の、三尺ほどの脚棍に乗つ

て、

ひよつくりこつくり西洋操人形のやうにやつ

てくる。

雪がふる。……

濕つた劇薬の結晶、

アンチピリンの、頓服剤の粉末のやうに――

それがまた青白い瓦斯に映つて

弊私的里の發作が過ぎた、そのあとの沈んだ氣

硝子の閉つた青い街を、

濡れに濡れた舗石のうへを、

ピアノが鳴る……金色の顫音の

潤むだ夜の空氣に緑を帯びて消えてゆく。

分の氛圍氣に  
落ちついた悲哀の斷片がしみじみと降りしき  
る。

そのとき、

酒場の薄い硝子から  
むちやくちやになつた神経が、馬鹿にしろとい  
ふ調子で、

それでも沈まりかへつて、  
恐怖と可笑の眼を瞠つたまま、

ふる雪を、

Blue devils の歩行を眺めてゐる。

ひよつくりこつくり顫へてゆく……

ピアノに合せた足どりの、ふらふらと兩手を振  
つて、あかしのやの禿げた並木をくぐりぬけ、  
三角形の街燈の鐵の支柱によろけかかつて腰  
をつき、

そそくさと、そそくさと、内隠から山葵色の罎を  
取り出し、

こくこくと仰向いて、苦さうな口のあたりに持

てゆく。

雪がふる………白く………薄青く………

それが鑿を收つて

ひよいと此方を見る。

涙の一杯たまった眼に

張のない麻痺しきつた笑を洩らしながら、

克明な靈のかたわれが

ひよつくりこつくり道化した身振に消えてゆく。

ああ、静かな夜、

何處かに幽かに杏仁水のほひがして  
疲れた官能が痺れてくる………

濡れたあかしやが銀の恐怖に光つて、

一ならび青い硝子に反射する——そのほかは

聲もせぬ通の長い鋪石のうへを

痺れて了つたピアノの顫音が、

ふる雪の断片が、

活動寫眞のまたたきのやうに  
音もなく瓦斯の光に顫へてゐる。

雪がふる。

Sara.....Sara.....Sara.....Sara.....Sara.....

薄ら青い、冷たい千萬の斷片が  
落ついた悲哀の光が、  
弊私的里の發作が過ぎた、そのあとの沈んだ氣  
分の氛圍氣に、  
しんみりとしたりズムをつくつて

しづかに降りつもる。

Sara.....Sara.....Sara.....Sara.....Sara.....

四十三年六月

## 解雪

わが憂愁は溶けつつあり、  
 黄色く赤くみどりに、  
 屋根の雪は溶けつつあり、  
 光りつつ、つぶやきつつ、滴りつつ……

日はすでにまぶしく、  
 菓子屋の煙突よりは烟のぼり、

病犬は跛曳きつつ舗石をゆく、  
 そのなかに溶けつつあるものの小歌。

やはらかにかよわく、ほそく、  
 そは裁縫機械のごとく幽かに、  
 いそがしく、  
 さまざまの光を放ちつつ滴る。

喪心のたのしさを聴け。  
 薄暗き地下室の厨女よ、

湯沸サモルの湯氣の呼吸イキも

玉葱のほとりにしづごころなし。

丸の内の三號、

その高き煉瓦より、笥より、また廂より、

かくれたる物の芽に沁シみたる無数の寶玉の溶ト

解カ

温かに劇薬のながれ濕シる音楽……

わが憂愁は溶トけつつあり、

黄色く、赤く、みどりに、

屋根の雪は溶けつつあり、

光りつつ、つぶやきつつ、滴したたりつつ……

四十三年六月



青  
い  
髯

青い髻

五月が来た。

硝子と乳房との接觸……桐の花とカステラ……  
春と夏との二聲樂、冷めたい冬……

とりあつめた空氣の淡い感覺到、

硝子戸のしみじみとした汗ばみに、

さうして、私の剃りたての青い面の皮膚に、

黄緑の Passion を燃えたたせ、顫はす

日光の痛さ、

その眩ぶしい音楽は負傷兵の鳴らす釣鐘のやうに、

恢復期の精神病患者がかぎりなき悲哀の Irony

に耽けるやうに、

心も身體も疲らした

その翌日の私の弱い險のうへに、

キラキラとチラチラと苦い顫音を光らす、

強く絶えず、やるせなく………

午前十一時半、

公園の草わかばの傷みに病犬の黄い奴が駈け

まわり、

禿げた樹木の梢がそろつて新芽を吹く、

螺施状の臭のわななきと、底力のはづみと、

Whiskey の色に泡だつ呼吸づかひと………

而して、わかい男の剃りたての面の皮膚の下か

ら

青い髯が萌える………

五月が来た。

どこかしらひえびえとした微風が

閃めく噴水の尖端からしづれて、

ニホヒイリスや和蘭陀薄荷のしめりを戦がせ、

ちつと、私が凝視むる、

小酒杯の透明な無色の火酒を顫はし、

黄緑の外光を浴びた青年の面のうへを、

なめらかに砥石のやうな青みを、

Poeの頬のやうな手ざはりを、

すいすいと剃刀のやうに觸れる、

私は無言で冷たい小酒杯をとりあげ、

しみじみと赤い唇にあてる……

五月が来た、五月が来た。

楠が萌え、ハリギリが萌え、朴が萌え、篠懸の並木  
が萌える。

そうして、私の

新しいホワイトシャツの下から青い汗がにじ

む、

植物性の異臭と、熱と、くるしみと、……

芽でも吹きさうな身体のだらけさ、

(何でもいいから抱きしめたい。)

萌える、萌える、萌える、萌える、

青い髯が

ウオツカの沁み込む熱い頬の皮膚から萌え

る。……

くわつとふりそそぐ日光、

冷たい風、

春と夏の二聲樂、……緑と金……

四十三年五月

## 五月

新しい烏龍茶と日光、

滋味もつた紅さ、

湧きたつ吐息……

さうして見よ、

牛乳にまみれた喫茶店の猫を、

その猫が惱ましい白い毛をすりつける

## 女の膝の弾力。

夏が来た、

静かな五月の晝湯沸からのぼる湯気が、

紅茶のしめりが、

爽かな夏帽子の麥稈に沁み込み、

うつむく横顔の薄い白粉を汗ばませ、

而してわかい男の強い體臭をいらだたす。

「苦しい刹那のごとく、黄ばみかけて

痛いほど光る白い前掛の女よ。  
「烏龍茶をもう一杯。」

四十三年五月

銀座花壇

赤い花、小さい花、石竹と釣鐘艸。  
かなしくよるべなき無智……

瓦斯の點いた  
勸工場のはいりくち、  
明るい硝子棚、紗の日被、  
夏は朝から惱ましいのに

花が咲いた……あはれな石竹と釣鐘草。

わか葉柳の並木路、撒水した煉瓦道、

そのなかの小さな人工花壇、

(疲れた腫の避難所)

その方二尺のかなしい区劃に、

夏がきて花が咲いた、小さい細い石竹と釣鐘草。

絶えず絶えず電車が通る……

おしろい汗を吹く草の葉に、

裁縫器の幽かな音に、

よせかけた自轉車の銀のハンドルの反射

日は光り、

かるい埃が薄い車輪をめぐる……

赤い花、小さい花、石竹と釣鐘草。

さうして女がゆく、

すすしい白のスカート

その手に持った赤皮の瀟洒な洋書、

いつかしら汗ばんだところに



異國趣味な五月が逝く……

新しい銀座の夏、

かなしくよるべなき人工の花、  
石竹と釣鐘艸。

四十三年五月

六月

白い静かな食卓布、

その上のフラスコ、

フラスコの水に

ちらつく花、釣鐘草。

光澤のある粹な小鉢の  
釣鐘草、

汗ばんだ釣鐘草、  
紫の、かゆい、やさしい釣鐘草、

さうして噎びあがる

苦い珈琲よ、

熱い夏のところに

私は匙を廻す。

高窓の日被

その白い斜面の光から

六月が来た。

その下の都會の鳥瞰景。

幽かな響がきこゆる、

やはらかい乳房の男の胸を抑へつけるやう

な……

苦い珈琲よ、

かきまわしながら

静かに私のところは泣く……

## 新聞紙

一九一〇、六月、はじめの月曜  
冷めたい朝の七時、  
つつましい馭者臺のうへに、  
ただひとり爽かに折りかへす新聞紙の  
緑の薄い反射……  
微かな鐵分をふくんだ空氣に

まだ青味を帯びた棕櫚の花が  
かよわい淡黄色に光り、  
ちらほらと夏帽子の目につく  
なつかしいだらだら坂の下の  
H 分署の前の通……せはしい電車の鐸……  
撒水夫の唧筒を動かすさびしさ、  
濠端の火の消えた瓦斯燈に  
白マントルが顫へ、  
その硝子の一點に日光の金が光つてる。

わかい馭者は  
窓のないカキ色の囚人馬車を  
梧桐のかけにひき入れたまま、  
しづかに読み耽る……

こころもち疲れた馬の呼吸……  
短く刈つた栗毛の光澤から沁み出る  
臭の奇異な汗ばみ、その上にさしかくる  
新聞紙の新しい觸感、

わか葉の薄い緑の反射。

新しい客を待つ間、  
やすらかな五分時が過ぎゆく……

四十三年六月

## 畜生

やはらかにかなしきは畜生の  
 ころなれ。

赤き日はアカシャのわか葉にけぶり、  
 蕨肉の黄なる花ちらちらと噎ぶとき  
 怖々と投げいだし、眠りたる靈の  
 人間の五官にもわきがたきいと深きかなし

み……

そのゆめはころもち汗ばみて  
 傷つきし銀毛の耳に  
 痛き花粉は沁み、  
 やるせなき肉體の憂鬱に  
 柔かにかろく魔さるれど、  
 汝が母を犯したる  
 靈の不倫をば知るよしもなし。

五時過ぎて暮ちかき夏の日は

血に染みし呼鈴の聲のごとくふりそそぎ、  
 嬬やかなる風は蜜蜂の褐色に、  
 蜜蜂のつばやきは  
 かるく花粉を落す。

汝が微かなる寢息は  
 腐れたる玉葱のほひにも沁み、  
 快く荒みゆく性の秘密にや笑ふらん。  
 匍ひよりし毛蟲の奇異なる緑にも  
 汝は覺めず……

ひとみぎり園丁の鋏の刃はかなたに光り、  
 掘りかへさるる土の香の濕潤吹き來る。

あはれ、かかる日に病みて伏す  
 やはらかにかなしき畜生の  
 捉へがたき微温の、やるせなきそのころ……

四十三年六月

## 隣人

隣人は露西亞の地主のごとく、  
 素朴な黒の上衣に赤木綿のバンドを占め、  
 長靴を穿き、  
 禿げた頭のきさくから他の畑を見回る。

隣人はよく蠶豆のなかに立ち、  
 雨に濡れた黄花蕨肉を眺める。

\* “Ogamadashi, Mauske” 自慢らしい手つきで  
 啣えたパイプの雁首をぼんとはたく。

隣人は見え坊だ、そりばつてん、  
 ごうかすると吝嗇漢だ、  
 世界苦の氣鬱から、  
 馬鈴薯を食べすぎた食傷から。

隣人は女房を恐れる、長崎うまれの  
 肥満女の息の臭い、馬鹿力のある、

それでよく小娘のやうにかぢりつく、  
牛肉と晝寢の好きな飲酒家。

隣人は日に一度黒い蒸汽をながめる、  
その悲しい面に洎芙蓉のやうな  
黄いろい日が光り、涙がながれる。  
さうして悄然と御燈明をあげにゆく。

隣人の宣教師、混血兒のベンさん  
氣まぐれな禿頭、

青い眼鏡をかけては街を歩行き、  
日曜の日には御説教。

“Changhang-deki no Mariya Sanna  
Ne wa yasuka-batten,  
utsukushikaken,  
Minasan yō ogan de wokinasare.”

\*お精がでます、茂助。

四十三年六月





いそぎんちやくの液しるのむづかゆい雨。  
 微かひくさいインキいろの青い雨。

雨……雨……雨……

雨はふる……雨はふる……

酸敗すえかかつた橡ささの葉の織せん維わに蛞蝓なめの銀線ぎんせんを

曳ひき、

臭くさい栗の花の白金はらを腐らし、

鐵粉てつのやうに光る芝生の土に沁み込み、

青い古池の面おもてに怪あやしい笑わらを亡ならせ、

せうことなしに雨はふる、ふりそそぐ、何時まで

も何時までも小止こどみなく……

陰氣いんな微かひくさい雨、長い雨……日ぐらしの雨……

ともすると疲つかれきつた悲愁かなしみの裏うらから

微かひかな日光の金きんを投げかくる雨。

雨のふる廢園はいの木立の暗くらい緑色きろくの空間くわん。

その洞ほらのやうな葉かげの恐怖こはにふりそそぐ

雨……

折をから、ひよいと、花やかに

地より身軽なひるがへり、躍り出したる怪のも  
 のが  
 突拍子もないひと躍り、……

Kappore! Kappore!

Amacha de Kappore!

Shiwocha de Kappore!

Yoito na! Yoito! Yoito!

緋のだんだらの尖帽に戲姿の道化師が

恐ろしさほど真白く白粉つけた呆けがほ。

Oki……no……0……0,

Kura……ai……no……ni……i, i,

Shira……a……Ho……ga……miyuru,

Are……wa……Ki……no……Ku……u, u……mi,

Ha! Yoito kono korewa no sa!

A! a! a! a!

Mika……n……Bu……u, u……ne……!

目も動かさず、白々と悪く澄ましたくはせ者、  
 燥ぎくるめく廉ものの  
 蓄音機から絞りだす囁—黄色な甲高の  
 三味の笑に挑まれて、  
 戯けつくした身のひねり、  
 突拍子もないひと躍り……

Ichi kake, Ni kake, San kake te,

Shi kake te, Go kake te, Hasyo kake te,

Kawai Okata wo……

ふいと消えたる變化もの、  
 白粉の濃い、手の白い、素足の白い、  
 唇の赤い沈黙……

雨はふる……雨はふる……

陰氣な微くさい雨……長い雨……日ぐらしの  
 雨……

気まぐれな不攝生のおとの痛ましい寂寥、  
 幻影の消え失せた雰圍氣の暗い緑に、

むづ痒ゆいやうな、氣の抜けた、さみしい、弱い、せ  
うことなしの

雨はふる………雨はふる………本能と神経の黄昏  
時。

いとしととしとしと、

絶間なく雨はふる、ふりそそぐ、葉から葉へ、しと  
と滴る。

深緑の闇い夜——ふる雨の黒いかがやき、  
廢れたる椽の葉に古池に靈の底の秘密へ、

日がな終日、晝間から、今日の朝から、昨日から、遠  
い日の日の夕から、

ふりつづく長い長い憂鬱の單音律、

その青い雨……微くさい雨……投げやりの雨……  
辛氣くさい静かな雨、かなしいやはらかな……

生温るい計畫の雨。

雨………雨………雨………

四十三年六月

## 葱の畑

寥しい靈が鳴いて居る。  
 そここの濕つた黒い土のなかで  
 晝の蟲が  
 幽かな、銀の調子で鳴いてゐる。

疲れた日光が  
 五時半ごろの重い空氣と、

湯屋の曇硝子とに、  
 黄色く滯れて反射し、  
 新しい臭のなかに弱つてゆく。

寂しい靈が鳴いてゐる。

毛なみのいい樺と白の犬が  
 交んだまま葱のなかにかくれてる。  
 眩しさうに首だけ覗いて  
 淀んだ瞳に

何物をか恐れてゐる。——  
息がしづかに莖の尖頭を顫はす。

何處かで百舌が鳴きしきる。

疲れた、それでも放縦な

三十過ぎた病身の女らしい、

湯屋の硝子戸を出ると直ぐ

石鹼のほひする身體をかがめて

嬰兒に小便をさしてゐる。

寥しい靈が鳴いてゐる。……

母の眼と嬰兒の眼が

一様に白い犬の耳に注がれる。

可愛いいちんぼこから小便が出る。

その尿と濡れた西洋手拭と、束髪と、

無意味な眼つきと、白っぽい葱の青みに、

しみじみと黄色な光がうつる。

しだいに反射がうすれて

外光が青みを帯びた。  
 煙突から薄い煙がたなびき  
 畑々の葱の尖頭には  
 銀色の露が光つてくる。  
 そしてなほ、湿つた黒い土のなかでは  
 寥しい蟲が、  
 幽かな晝の調子で鳴いてゐる。

寂しい寂しい寂しい畑。

四十三年一月

### 八月のあひびき

八月の傾斜面に、

美しくしき金の光はすすり泣けり。

こほろぎもすすりなけり。

雑草の緑もともにすすり泣けり。

わがこころの傾斜面に、

滑りつつ君のうれひはすすり泣けり。



よろこびもすすり泣けり。  
 悪縁あくえんのふかき恐怖おそもすすり泣けり。

八月の傾斜カタ面に、

美しくしき金きんの光はすすり泣けり。

四十三年八月

## 秋

日曜の朝、秋は銀かな貝の細巻の  
 絹薄き黒の蝙蝠傘かぶさしてゆく、  
 紺の背廣に夏帽子、  
 黒の蝙蝠傘かぶさしてゆく、

潇洒にわかき姿かな。秋はカフスも新らしく  
 カラも眞白につつましくひとりさみしく歩み

來ぬ。

波うちぎはを東京の若紳士めく靴のさき。

午前十時の日の光海のおもてに廣重の

藍を燻して、蟲のごと白金のごと閃めけり。

かろく冷たき微風も鹹をふくみて薄青し、

「秋」は流行の細卷の

黒の蝙蝠傘さしてゆく。

日曜の朝、「秋」は匂ひも新らしく

新聞紙折り、さはやかに衣囊に入れて歩みゆく、  
寄せてくづるる波がしら、濡れてつぶやく銀砂  
の、

靴の爪さき、足のさき、パツチパツチと蟲も鳴く。

「秋」は流行の細卷の

黒の蝙蝠傘さしてゆく。

槍  
持

おかる勘平

おかるは泣いてゐる。

長い薄明うすあかりのなかでびろうご葵の顔へてゐるやうに、

やはらかなふらんねるの手ざはりのやうに、

きんぼうげ色の草生くさぶから晝の光が消えかかる

やうに、

ふわふわと飛んでゆくたんぼほの穂のやうに。

泣いても泣いても涙は盡きぬ、  
勘平さんが死んだ、勘平さんが死んだ、  
わかい奇麗な勘平さんが腹切つた……

おかるはうらわかい男のにほひを忍んで泣く、  
麴室に玉葱の咽せるやうな強い刺戟だつたと  
思ふ。

やはらかな肌ざはりが五月ごろの外光のやう  
だつた、

紅茶のやうに熱つた男の息、  
抱擁められた時、晝間の鹽田が青く光り、  
白い芹の花の神経が、鋭くなつて眞蒼に凋れた、  
別れた日には男の白い手に烟硝のしめりが沁  
み込んでゐた、  
駕にのる前まで私はしみじみと新しい野菜を  
切つてゐた……

その勘平は死んだ。

おかるは温室おんしつのなかの孤兒みだこのやうに、  
 いろんな官能くわんのうの記憶きおくにそそのかさされて、  
 楽しい自身の愉快ゆかいに耽たふつてゐる。

(人形芝居にんぎやうしばの硝子越しよこしに、あかい柑子の實みが秋の  
 夕日ゆふひにかがやき、黄色く霞かすみんだ市街しがいの底そこから  
 河蒸氣かじょうきの笛ふえがきこゆる。)

おかるは泣ないてゐる。  
 美しくしい身振みぶりの、身みも世よもないといふやうな、  
 追おつた三味さんまいに連つれられて、

チヨボの佐和利さわりに乗のつて、  
 泣ないて泣ないて溺おぼれ死しにでもするやうに  
 おかるは泣ないてゐる。

(色いろと匂におひと音楽おんがくと。  
 勘平かんぺいなんかごうでもいい。)

## 雪の日

淡青い雪は

冷めたい硝子戸のそとに。……

紫の御召をひきかけた

濱勇は

東の棧敷に。

薄い襟あしの白粉も見よきほどに  
 ころもち斜ななめに坐つて。

うつむき加減かげんにした横顔の  
 淡青い雪の反射。

静かに曳かれてゆく幕そとの、

立三味線、

仁木の青い目ばりの凄さ。

暮れかかる東京のそらには

ほんのりと瓦斯が點き  
淡青い雪がふる。

半玉は冷めたい指をそろへて、  
引込の面あかりをながめ、  
なにかしらさみしさうに。  
淡青い雪は  
冷めたい硝子戸のそとに。

幽かな音、幽かな色、幽かなささやき……

四十三年七月



## 種蒔き

バツチバツチと鳴く蟲の  
 晝のさびしさ、つつましさ、……  
 葱の畑のそこここに銀の懷中時計を閉める音。  
 けふも彼岸のあかるさに、  
 誰に見しよとか、權兵衛は  
 青い手拭、頬かぶり、

枳を小腕に、ひえびえと畝のしめりを踏んでゆ  
 く。  
 畝の光に蒔く種は  
 かなしみの種、性の種、黒稗の種。  
 バツチバツチと鳴く蟲の  
 晝のさびしさ、しをらしさ、……  
 強い日射のそこここに若いころの咽ぶ音。  
 ほんに一日齧齧と

歎き足らひで、權兵衛が  
青いバツチに繩の帶、

及び腰してひとすぢに土の臭を嗅いでゆく  
午後ごごの光に蒔く種は  
かなしみの種、性の種、黒稗くろひえの種。

バツチバツチと鳴く蟲の

晝のさびしさ、なつかしさ。……

黒い鴉からすの嘴くちばしに種のつぶれてなげく音。

若い身そらの内密事、

ひとり苦くに病やむ權兵衛が、

歩みのろさ、手の痛いたさ、

腰の痛いたみにしじみと明あき其夜を泣いてゆく。

銀ぎんの祕密ひみつに蒔く種は

かなしみの種、性の種、黒稗くろひえの種

バツチバツチと鳴く蟲の

晝のさびしさやるせなさ。……

常に啄つまれて生れ得ぬ種の、嬰兒あかこの、なげく音。

妻も子もない醜男の  
何時も吝嗇い権兵衛が  
貧の盗みか、一擁え  
葱を伏せつつ、怖々と畝の凸みを凝視めゆく、  
伏せたところに蒔く種は  
かなしみの種、性の種、黒稗の種。

バツチバツチと鳴く蟲の  
晝のさびしさおそろしさ。……

黒い眼玉が背後からちつと睨んで歩む音。

欲のつかれか、冷汗か、  
鐘が唸れば権兵衛の  
野暮な胸さへしみじみと、  
金の入日の凌雲閣傷みながらに蒔いてゆく。  
けふの恐怖に蒔く種は  
かなしみの種、性の種、黒稗の種。

バツチバツチと鳴く蟲の

晝のさびしさ情なさ。……  
黒い鴉につぶされて種の凡の滅ゆる音。

四十三年十月

忠 彌

雪はちらちらふりしきる。

城の御濠の深みどり、  
雪を吸ひ込む舌うちの  
しんしんと沁むたそがれに、  
鴨の氣弱がかきみだす  
水の表面のささにごり

知るや知らずや、それとなく  
 小石投げつけ、  
 ひつそりと底のふかさをききすます  
 わかき忠彌か、わがおもひ。

君が秘密の日くれどき、  
 ひとり心につきつめて  
 そつとさぐりを投げつくる  
 深き恐怖か、わが涙  
 千萬無量の瞬間に

雪はちらちらふりしきる。

四十五年十一月

歌うたひ

悲しいけれどもわしや男、  
いやでもお酒をさがしませう、  
赤いセエリイもないならば  
飲んだふりして就寝みませう。  
みすぎ世すぎの歌うたひ。

四十三年十一月

槍持

槍は鏽びても名は鏽びぬ、  
殿につきそふ槍持の槍の穂尖の悲しさよ。

槍は槍持、供揃、

さつと振れ、振れ、白鳥毛。

けふも馬上の寛濶に、

殿は伊達者の美しい男、

三國一の備後様、

しんごころりご見とれる殿御。

槍は槍持、銀なんぼ。

供の奴さへこのやうに、あれわいさの、これわい

さの、取りはずす、

やあれ、やれ、危なしやの、槍のさき。

槍は鏽びても名は鏽びぬ、

殿のお微行、近習まで

身なりくづした華美づくし、

槍は九尺の銀なんぼ、

けふも酒、酒、明日もまた、

通ふしだらの浮氣づら、

わたる日本橋ちらちらと雪はふるふる、日は暮  
れる、

やあれ、やれ、冷たしやの、槍のさき。

槍は槍持、供ぞろへ、

さつと振れ、振れ、白鳥毛。

雪はふれども、ちらほらと  
 河岸かの問屋しの灯ひが見ゆる、  
 さてもなつかし飛ぶか鷗りう、  
 壁かのしたには廣重ひろしげの紺くろのぼかしの裾すそ模様、  
 殿どのの御容ごよう量りやうに、ほればれと  
 わたる日本橋にっぽんばし、槍やりのさき、  
 槍やりは擔かげご、空うらのそら、澁しぶ面めんつくれど供奴ごんや、  
 ぴんとはねたる附髭つけひげに、雪はふるふる、日は暮れ  
 る。

やあれ、やれ、やるせなの、槍やりのさき。

槍やりは槍持やりもち、供ごぞろへ、

さつと振れ、振れ、白鳥毛。

槍やりは鏽さびびても名は鏽さびびぬ。

殿どのにつきそふ槍持やりもちの槍やりの穂ほさきの悲かなしあはれまよ。

いつも馬上ばしやうの寛濶かんくわくに、

殿どのは伊達者いただもののよい男、

さぞや世間よかんの取沙汰とりさたに



浮かれ騒ぐも女なら。  
 そこらあたりの道すちの紺の暖簾のも気がかり  
 な。

槍は九尺の銀なんぼ、  
 槍を持つ身のしみじみと、涙流すもつとめ故、  
 さりこは、さりこは、供奴さるこ、  
 雪はふるふる、日は暮れる。  
 やあれ、やれ、しよんがいな、槍のさき。

四十五年三月

## CHONKINA.

“Chonkina ! ehonkina !

Chon-ehon kina-kina !

Chon ga nanoso de,

Cho-ehon ga yoi !.....”

「赤い夕日、  
 活動寫眞見たいなキラキラが、あのやうに、あれ、

御覽な。

お向ふの三層樓の高い部屋の障子に、何時まで

も何時までも照りつける辛氣くささ、

寝まきや、長編袴の、

如何したんだらうねえ、まあ、

兩肌なんか脱いだりさ、

欄干に腰かけたり、跨いだり、

自墮落な、あれさ、落こつたらどうするの、

氣まぐれも大概になさいなね、

あれ、あの手も眞赤な狐拳！」

「Chon-aiko I chon-aiko I.....」

「華魁、ちよいと、御覽なさいな、

久し振で裏門が開いたと思つたら、

大變ですわねえ、あれ、あんなに水が、

随分しごい音だこと、

堤をもう越したんですさ。

龍泉寺、山谷、今戸のわたし、

そりやもう大變な騒よ、

おやおや、まあ、素つ裸で、  
揚屋町の通を傳馬擔いで奔るなんて  
銀ちやん、威勢がいいことねえ。」

“Chon-aike ! Chon-aike !……”

「華魁、何をそんなに見てお出でなの、  
くよくよとさ、  
黄色いふたつの高張に  
赤い日が、あのやうに射しかけて、

びちやびちやと濁水が凄いわねえ、  
あら、ちよいと、そんな處で  
おちんこなんか捲くるもんぢやありませんつ  
たら、  
小兒は罪が無ことねえ、ほほほ。まあ。」

“Chonkina ! ehonkia !

Chon-ehon, kina-kina,

Chon ga nanoso de,

Cho-ehon ga yoi,

Aiko de yoi,.....

Chon-aiko I chon-aiko .....

吉原きちげんの中店ちゆうてんの  
 お職しやく「小主水こしゅすい」とて、愁うれひ顔かほの寥さびしい、  
 ごうしたことやら、  
 白粉おしろいもまだつけぬ青あおいいろの、  
 なつかしい眼めつきの女をんな、  
 疲つかれたやうに、藍色あいらいの薄うすいネルを着きながして  
 新造しんぞうと二人ふたり、

——ひごりは立膝——  
 華魁かゑんは灯ひのつかぬ五時ごじごろの  
 薄暗うすぐらい角店かくてんの二重にぢゆうに腰こしかけて、  
 何なにとやら澄すまぬ顔かほ、  
 左ひだりの人ひとさし指ゆびの薄うすい緋ひ帯おびに  
 金かねいろの背うしろの附立つきたてが、  
 支那しな彫ぼりの唐獅子からししの、  
 冷つめたい光ひかりを投なげかくる。  
 そのさだまらぬ陰影かげのかげの  
 そのなかの幽おぼかなためいき.....

“Chonkina ! Chonkina !.....”

格子戸越しに、赤い日が  
高い屋並の不思議な廂にてりかへし、  
洪水の音がきこえる。  
欄干では何時までも何時までも  
氣まぐれな狐拳。

“Chon-aiko ! chon-aiko,

Chon-chon aiko-aiko,

Chon ga nanoso de

Cho-chon ga yoi.....”

“Chonkina ! chonkina !.....”

四十三年七月

## 鬼百合

夏の日の東京に  
歌澤のころいさ……

しみじみと身にしみて  
きく年増、  
すらりとした立姿の  
中形の薄青さ、

それしやの粹なころに。

日がそそぐ……銀色のきりぎりす  
浮気男を殺した  
晝寝の夢の凄さ、  
たてひきの憎さ、  
かなしさ、つらさ、くるしさ、  
日がそそぐ……わかにお七の半鐘か、死ぬるきりぎりすか。  
銀の光の細かな強いすすりなき。

大河をまへに、  
 唇に啣えた帶留の金――  
 手をうしろにまはして、  
 暑さうなものごしの、  
 なにかしら寂しさうに、  
 きりきりと締め直す黒い繻子の一筋。  
 けだるげな三味線が  
 あれ、またもあのやうに、……

青みもつ目のふちの疲れから  
 なにを見るごなし熟視むる  
 黒い腫の深さ、  
 酸いも甘いも噛みわけた  
 中年の激しい衝動……その底のさみしさ、つら  
 さ、かなしさ。  
 黒い繻子の手ざはりが  
 きゆつ、きゆつと……

暑い、苦しい、くるしい日、

濼い鬼百合の赤さ、

鮮かな臭の強さ、

湿つた褐色の花粉の

細かにちる……背後の床の間の大輪。

觸る帯の縹子、やはらかな粉、

こころもきゆつきゆつと……

夏の日のさる河岸に

歌澤のこころいき。

ええまあ、

奈何すりや宜いつてんだらうねえ。

四十三年七月



## 道化もの

ふうらりふらりと出て来るは  
 ルナアパークの道化もの、  
 服は白茶のだぶだぶと戯け澄ました身のまわ  
 り、  
 あつち向いちやふうらふら、  
 こつち向いちやふうらふら、  
 緋房のついた尖がり帽子がしをらしや。

鉛粉眞白けで丸ふたつ  
 頬紅さいたるおどけづら、  
 圓い眼ばりもくるくると今日も呆けた宙がへ  
 り。  
 かなしやメエリイゴラウンド、  
 さみしや手品の皿まわし、  
 春の入目の沈丁花がどこやらに。  
 ひとが笑へばにやにやと、

猫のなきまね、鳥啼き、  
 たまにやべそかき赤い舌、嘘か、色眼か、涙顔。  
 鳴いそな鳴いそ春の鳥、  
 鳴いそな鳴いそ春の鳥、  
 紙の櫻もちらちらとちりかかる。

薄むらさきの圓弧燈、

瓦斯と雪洞、鶴のむれ、

石油エンジンことこと水は山から逆おとし、  
 臺灣館の支那の兒

足の小さな支那の兒、

しよんぼり立つたうしろから馬鹿囃子。

ぬうらりしやらりと日が暮れて

またも夜となる、道化もの、

あかい三角帽をちよいと投げてひよいと受け

たら禿頭。

あつち向いちやくうるくる、

こつち向いちやくうるくる、

御愛嬌ごあいぎやうか、またしてもとんぼがへり。

四十四年三月

あそびめ

たはれをのかすのまにまに  
 じだらくにみをもちくづし、  
 おしろいのあをきひたひに  
 ねそべりてひるもさけのみ、  
 さめざめとさきになみだし、  
 ゆふかけてさやぎいづとも、  
 かなしみはいよよおろかに、ながねがひいよよ

つめたし。

あはれよのしろきねごこの  
まくらべのベコニヤのはな。

四十五年五月

## 南京さん

李さん、鄭さん、支那服さん、  
あなたの眼鏡はなせ光る、  
涙がにじんで日に光る。  
鳥屋の硝子も日に光る。  
目白、カナリヤ、四十雀、  
鶉くろつぐろに文鳥に黒鶉、  
鳥もいろいろあるなかに

おかめ鸚哥いんこはおどけもの  
 焦ぢれて頓狂に啼きさけぶ。  
 さてもいとしや、しをらしや、  
 けふも入日があかあかと  
 わかい南京ナンキさんは涙顔。

四十四年十月

## 蝮捕り

旅のすがたの蝮捕り。  
 紺の脚絆に紺の足袋、  
 紺の小手あて、盲縞。  
 羽織、腹掛しやんとして草鞋つつかけ忍びあし。

わかい男の忍びあし、  
 まがひバナマに日が射せば、

苦みばしつた横顔のことにつやつや蒼白く、  
 ほそく割いたる青竹に蝮挟みてなつかしく、  
 渚のほとり、草土手の曼珠沙華さくしたみちを、  
 九月午後、忍びあし。

静かにゆるき潮鳴は、

夏と秋との伴奏、

五十三次、廣重の海の匂もまだ熱く、  
 眉にかがやく忍びあし、……  
 蝮の腹もいと青く。

けふのこの日の蝮捕り、――  
 渡りあるきの生業の昨日の疲れ、  
 明日の首尾、  
 案じわづらふ足もとに飛んで跳ねたはきりぎ  
 りす。  
 疲れた三味が鳴るわいな。

意気な年増の手すさみか、  
 取り残された避暑客の後の一人の爪弾か、

離縁られた人か、死ぬ人か、  
 思ひなしかは知らねども、  
 昨日あがつた心中の男女の忍び泣き、……  
 あれ三味が鳴る、晝日なか、  
 知らぬ都のふしまはし。

わかい吐息の忍びあし、  
 そつと留めて、聞惚れて、なにをおもふや、うつと  
 りと、

腹の腹の青縞の博多帯めくつややかさ、

きゆつきゆと白き指つけて、拭きつ、さすりつ、薄

笑みつ、

九月、午後、日の光――

こころの縞もいと青く。

腹よ、腹よ、やはらかな、熱い冷たい手觸りの、

そなたも三味にきき惚れて身をうねらすや、や  
 るせなく、……

平首、竹に挟まれて、されどゆかしく、あどけなく、  
 無心に瞠る眼のいろは空と海との水あさぎ。

腹よ小さい尾のさきの、匂の肌をつまぐれば、  
 毒ある汗はいきいきと、神經のごと細やかに、  
 朱の斑なまめく褐と黄の波斯模様の美しくしさ、  
 それか、怪しき淫れ女の  
 聞きこの麝香じやくかうの息づかひ。

九月午後、日の光――

あれ三味が鳴る、きりぎりす、  
 飛んで死んだがましかないな。

四十四年九月

## 雪と花火



夜ふる雪

蛇目じやのめの傘かさにふる雪ゆきは  
むらさきうすくふりしきる。

空そらを仰あやげば松まつの葉はに  
忍しのびがへしにふりしきる。

酒さけに酔ようたる足あしもこの

薄い光にふりしきる。

拍子木をうつはね幕の  
遠いところにふりしきる。

思ひなしかは知らねども  
見えぬあなたもふりしきる。

河岸の夜ふけにふる雪は  
蛇目の傘にふりしきる。

水の面にその陰影に  
むらさき薄くふりしきる。

酒に酔うたる足もとの  
弱い涙にふりしきる。

聲もせぬ夜のくらやみを  
ひとり通ればふりしきる。

思ひなしかはしらねども  
 こころ細かにふりしきる。

蛇目じやのめの傘にふる雪は  
 むらさき薄くふりしきる。

四十四年一月

### 柳の左和利

ほの青い雪ゆきのふる夜に、  
 電車でんしゃみちを、

酔つて、酔つて、酔つばらつてさ、ひよろひよると、  
 ふらふらと、凭たれかかれは、硝子戸がらこに。

Yoi!.....Yoi!.....Yōtona!.....

ほの青い雪ゆきはふり、

店のなかではしんみりと柳の佐和利、  
 酔つて酔つて酔つばらつてさ、ふらふらと、  
 ひよろひよろと首をふれば太棹が……

Yoi!.....Yoi!.....Yoitona!.....

ほの青い雪の夜の  
 蓄音機とは知つたれど、きけばこの身が泣かる。  
 る。

酔つて酔つて酔つばらつさ、ひよろひよろと、  
 ふらふらと投げてかかれれば、その咽喉が……

Yoi!.....Yoi!.....Yoitona!.....

ほの青い雪のふる

人ひとり通らぬこの雪に、まあ何とした、

酔つて酔つて酔つばらつてさ、ふらふらと、

ひよろひよろと、しやくりあぐれば誰やらが、

Yoi!.....Yoi!.....Yoitona!.....

四十四年一月

春の鳥

鳴きそな鳴きそ春の鳥、  
 昇菊の紺と銀との肩ぎぬに。  
 鳴きそな鳴きそ春の鳥、  
 歌澤の夏のあはれとなりぬべき  
 大川の金と青とのたそがれに。  
 鳴きそな鳴きそ春の鳥。

四十三年四月

かるい背廣を

かるい背廣を身につけて、  
 今宵またゆく都川、  
 戀か、ねたみか、吊橋の  
 瓦斯の薄黄が氣にかかる。

四十三年七月

## 薄あかり

銀の時計のつめたさは  
 薄らあかりのVIIの字に、  
 君がこころのつめたさは  
 河岸の月夜の薄あかり。  
 薄いなさけにひかされて、けふもほのかに來は  
 來たが、

心あがりのした男、何のわたしに縁がある。

空の光のさみしさは

薄らあかりのねこやなぎ、

歩むこころのさみしさは

雪と瓦斯との薄あかり。

思ひ切らうか、切るまいか、そつと歸るか、何とせ  
 う。

いつそあの目のくちつけを後のゆかりに別れ

よか。

水のにほひのゆかしさは

薄らあかりの鴨の羽、

三味のねじめのゆかしさは

遠い杵屋の薄あかり。

かるい背廣を身につけてじつと凝視<sup>み</sup>むる薄あ  
かり。

薄い涙につまされて、けふもほのかに來は來たが。

銀の時計のつめたさは

薄らあかりのVIIの字に、

君がこころのつめたさは

青い月夜の薄あかり。

戀か、りんきか、知らねども、ほんに未練な薄あか  
り。

思ひ切らうか、たづねよか、ええ何とせう、しよん  
がいな。

## 金と青との

金と青との愁夜曲、  
 春と夏との二聲樂、  
 わかい東京に江戸の唄、  
 陰影と光のわがこころ。

四十三年五月

## 雨あがり

やはらかい銀の毬花の、ねこやなぎのにはふや  
 うな、  
 その湿つた水路に單艇はゆき、  
 書割のやうな杵屋の  
 裏の木橋に、  
 紺の蛇目傘をつぼめた、  
 つつましい素足のさきの爪草のつや、



薄青いセルをきた筵若の  
それしやらしいたたすみ……

ほんに、ほんに、

黄いろい柳の花粉のついた指で、

ちよいと今晚は、

なにを弾かうつていふの。

四十三年七月

## 水盤

そなたの移した水盤すゐばんに、

薄い硝子の水の

微かすかな光、

新内のながしも通るのに、

ほんごに睡ねちやつたの。

そなたの冷ひやめたい手は

わたしの胸に、  
 薄いセルは  
 微かな涙に、  
 ほんどに睡ちやつたの。

そなたの寢息は  
 桐の花のやうに、  
 やるせないところをそそのかし、  
 捉へかぬる微かな光。  
 ほんどに睡ちやつたの。

そなたのけふ入れた緋鮒か、  
 それとも陶器の金魚かしら、  
 なにかしら寂しい力の  
 薄い硝子に觸るやうな……  
 ほんどに睡ちやつたの。

そなたの知つてる男は  
 みんな薄情ものだ。  
 さうしてそなたが眠むつてから

何時でもこんな風にささやく、  
ほんとうに睡ちやつたの、

四十三年七月

心  
中

あはれなる心中のうはさより  
わが靈は泣き濡れてかへりゆく、  
花つけしアカシヤの並木のかげを、  
婿やかなる七月のおとづれのごとく。

やすらかに平準らされしころは  
あるものの抑壓のかげにありて、

つねにかかる微顫をこそそのぞみたれ。  
いみじく幽かなるその Lied よ。

附きやすき花粉のしめりのごとく、

そはまた睡の汗のごとくに顫へやすし。

護謨輪のゆけばためらひ、

吊橋の淡黄なる瓦斯のものを泣きゆく。

新道を抜けては

榭の芽のむせびをあはれみ、

御神燈のかげをば

それしやの浴衣ともすれちがふ。

とある河岸のおでんやには

寄席のピラのかなしく、

薄汗の光る紙に

水菓子の色透くがいとほし。

あはれなる心中のうはさより

わが靈は泣き濡れてかへりゆく、

微風そよかぜの吹くままに過ぎゆく  
嬬なまやかなる七月のおとづれのごとく。

四十三年七月

花 火

花火はなびがあがる、  
銀ぎんと緑きょくの孔雀玉けいこくだま……パツと  
しだれてちりかか

紺青こんせいの夜の薄うすあかり、  
ほんにゆかしい歌麿かまろの舟ふねのけしきにちりかか  
る。

花火が消ゆる。

薄紫の孔雀玉……紅くそろけてちりかかる。

Toron……tonfon……Tonon……tonfon……

色どにほひがちりかかる。

兩國橋の水と空とにちりかかる。

花火があがる。

薄い光と汐風に、

義理と情の孔雀玉……涙しとしとちりかかる。

涙しとしと爪弾の歌のこころにちりかかる。

團扇片手のうしろつきつんと澄ませど、あのや  
うに

舟のへさきにちりかかる。

花火があがる、

銀と緑の孔雀玉……パツとかなしくちりかか  
る。

紺青の夜に、大河に、

夏の帽子にちりかかる。

アイスクリームひえびえとふくむ手つきにち

りかかる。  
わかいこころの孔雀玉、  
ええなんとせう、消えかかる。

四十四年六月

放 埒

放埒のかなしみは  
ひらき盡くせしかはたれの花の  
いろの、にほひのちらんとし、ちりも了らぬあは  
ひとか。

かかる日の薄明に、  
しどけなき恐怖より螢ちらつき、

女の皮膚にシャンペンの香からめば、  
 そは支那の留學生もなげくべき  
 尺八の古き調子のころなり。

うら若き藝妓には二上りのやるせなく、  
 中年の心には三の絲下げて弾くこそ、  
 下げて弾くこそわりなけれ。

かくて、日のありなし雲の雨となり、  
 そそぐ夜にこそ。

おしろい花のさくほどり、しんねこの幽かなる  
 音を泣くべけれ。

放埒のかなしみは  
 ひらき盡くせしかはたれの花の  
 いろの、にはほひの、ちらんとし、ちりも了らぬあは  
 ひとか。

四十三年八月



## 紫陽花

かはたれに紫陽花の見ゆるこそさみしけれ。  
 うらわかき盲人のいろ飽まで白く、  
 そのほとりに頬を寄するは――  
 かるくかさねし手のひらの弾く爪さき、それと  
 なく、  
 隆達ぶしの唱歌など思ひ出づるはいとかなし。

誰かつくりし戀のみち、いかなる人も踏み迷  
 ふ……

よしやわれにも情あれ。寮の日くれの、あ、もの憂  
 や、  
 何ぞせうぞの。鯛の金の線條顫はす聲も、  
 縁さへあらば、またの夕日にチレチレ  
 またの夕日に時雨るる。

おはぐるごぶのかなしみは  
 岐阜提燈のかげうつる茶屋のうしろのながし

湯の  
石<sup>しや</sup> 鱒<sup>ほん</sup>のほひ、微<sup>かひ</sup>の花、青いどんぼの眼<sup>め</sup>の光。

よひやみの、よひやみの、  
いづこにか、赤い火花<sup>はなびら</sup>があがるよの、  
音<sup>ね</sup>はすれども、そのゆめは  
見えぬころにくづる……

ほのかにも紫陽花<sup>あざみ</sup>のはな咲けば、  
新<sup>あらた</sup>にかけし撒水<sup>まきみづ</sup>の

香<sup>か</sup>のうつりゆくしたたり、  
さて、消えやらぬ間の片戀。

## カナリヤ

たつた一言ひとこときかしてくれ。

カナリヤよ、

たんぼほいろのカナリヤよ、

ちろちろと飛びまはる、ほんに浮氣なカナリヤ  
よ。

おしやべりのカナリヤよ。

たつた一言ひとこときかしてくれ、

丁度ちやうど、弾ひきすてた歌澤うたがわの、

三さんの絃いの消いゆるやうに、

「わたしはあなたを思おもつてる。」と。

## 彼岸花

憎い男の心臓を

針で突かうとした女、

それは何時かのたはむれ。

晝寝のあとに、

ハツとして、

けふも驚くわが疲れ。

憎い男の心臓を

針で突かうとした女、――

もしや棄てたら、キツとまた。

ごうせ、湿地の

彼岸花、

蛇がからめば

身は細そる。

赤い、濕地しつちの  
彼岸花、

午後の三時の鐘が鳴る。

四十四年十一月

もしやさうでは

もしやさうではあるまいかと  
思うても見たが、  
なんの、そなたがさうである、  
このやうなやくざにと、――  
胸のそこから血の出るやうな  
知らぬ偽いつはりいうて見た。

雪のふる日に  
 赤い酒をも棄てて見た。  
 知らぬふりして、  
 ちんからど  
 鳴らしたその手でさかづきを。

四十四年十一月

## 片足

花が黄色で、芽がしよぼしよぼで、  
 見るも汚きたない梅の木に  
 小鳥とまつて鳴くことに、  
 あれ、あの雪の麥畑むぎはたの、つもつた雪のその中に、  
 白い女の片足が指のさきだけ見えて居る。  
 はつと思つて佇めば、

小鳥逃げつつ鳴くことに、  
 何時か憎いと思ふたくせに、  
 卑怯未練な安心さしやれ、  
 あれは誰かの情婦でもなけりや、  
 女乞食の兒でもない。  
 一軒となりの奎右衛門ごんの  
 嬢の娘が投げすてた白い人形の片足ぢや。

四十四年十二月

あらせいごう

人知れず袖に涙のかかるとき、  
 かかるとき、  
 ついぞ見馴れぬよその子が  
 あらせいごうのたねを取る。  
 丁度誰かの爲るやうに  
 ひどり泣いてはたねを取る。  
 あかあかと空に夕日の消ゆるとき、

植物園に消ゆるとき。

四十三年十月

あかい夕日に

あかい夕日につまされて、  
酔うて珈琲店を出は出たが、  
どうせわたしはなまけもの  
明日の墓場をなんで知る。

四十三年十月



銀座の雨

銀座の雨

雨……雨……雨……

雨は銀座に新らしく

しみじみとふる、さくさくと、

かたい林檎の香のごとく、

舗石の上、雪の上。

黒の山高帽、  
獵虎の毛皮、

わかい紳士は濡れてゆく。  
蝙蝠傘の小さい老婦も濡れてゆく。

……黒の喪服と羽帽子。

好いた娘の蛇目傘。

しみじみとふる、さくさくと、

雨は林檎の香のごとく。

はだか柳に銀緑の

冬の瓦斯點くしほらしさ、

棚の硝子にふかぶかど白い毛物の春支度。

肺病の子が肩掛の

弱いためいき。

波斯の絨氈、

洋書の金字は時雨の曇、

Henri De Régnier が曇り玉、

息ふきかけてひえびえと

雨は接吻のしのびあし、

さても緑の、寶石の、時計、磁石のわびどころ、

わかいロテイのものおもひ。

絶えず顛へていそしめる

お菊夫人の縫針ぬいはりの、人形ミシンのさざめごと。  
 雪の青さに片肌ぬぎの  
 たぽもつやめく髪かみの型かた、つんとすねたり、かもじ  
 屋に

紺は匂ひて新らしく。

白いビエロの涙顔。

熊とおもちやの長靴は

児供ごころにあこがるる

サンタクロスの贈り物。

外そとはしとしと淡雪うすゆきに

沁みて悲しむ雨の絲。

雨は林檎の香のごとく

しみじみとふる、さくさくと、

扉ドアを透かしてふる雨は

Verlaineの涙雨、

赤いコップに線すぢを引く、

ひとり顔へてふりかくる

辛い胡椒からに線すぢを引く、

されば聲出す針はりの尖さき、蓄音器屋にチカチカと

廻るかなしさ、ふる雨に  
 酒屋の左和利、三勝もそつと立ちぎく忍び泣き。  
 それもそうかえ淡雪の  
 光るさみしさ、うす青さ、  
 白いシヨウルを巻きつけて  
 鳥も鳥屋に涙する。  
 椅子も椅子屋にしよんぼりと  
 白く寂しく涙する。  
 猫もしよんぼり涙する。  
 人こそ知らぬ、アカシヤの

性の木の芽も涙する。

雨……雨……雨……

雨は林檎の香のごとく  
 冬の銀座に、わがむねに、  
 しみじみとふる、さくさくと。

四十四年十二月

## 雪

雪でも降りさうな空あひだね、今夜も  
 ほら、もう降つて来たやうだ、その薄い色硝子を  
 透かして御覽。  
 なつかしい圓弧燈に眞白なあの羽蟲のたかる  
 やうに  
 細かなセシユアルな悲しみが、向ふの空にも、  
 橋にも柳にも、

水面にも、  
 書割のやうな遠見の、黄色い市街の燈にも、  
 多分冷たくちらついてゐる筈だ。それとも積つ  
 たかしら。  
 幽かな囁き……幽かなミシンの針の  
 薄い紫の生絹を縫ふて刻むやうな、  
 色澤のある寂しいリズムの閃めきが、  
 そなたの耳にはきこえないのか……湯から上  
 つて、  
 もう一度透かして御覽、乳房が硝子に慄へるま

で。

曇つたのぼせさうな湯殿に、  
 白い湯氣のなかに、  
 螢が飛ぶ………隣のにほひの螢が、  
 ほうつほうつと………あれ銀杏がへしの  
 つんと張つた鬢のうらから  
 肩から、タオルからすべつて消える。  
 ほうつほうつと。

さうではない、さうではない、  
 すらりとした兩つのほそい腕から、  
 手の指の綺麗な爪さきの線まで、  
 何かしら石鹼シキが光つて見えるのだ、さうして  
 魔氣のふかい女の素はだかの感覚から  
 忘れた夏の記憶が漏電する。  
 ほうつほうつと螢が光る。  
 不思議な晩だ、まだ鍔を取つたまま  
 何時までも足の爪を剪つてゐるのか、お前は  
 泪ナ芙フ藍湯ランの温かな匂から、

香料のやはらかななげきから、  
おしろいから、

夏の日のあめも美しく

女は踊る、なつかしいドガの Dancer

雪がふる……降つてはつもる……  
しめやかな悲しみのリズムの  
しんみりと夜ふけの心にふりしきる……  
ほうつほうつと、螢が飛ぶ……  
あれごらん、綺麗なこと、

青、黄、緑、……さうしてうすいむらさき、  
雪がふる……降つてはつもる……  
そつとしておきき、何處かでしめやかな三味線  
が、  
あれ、もう消えて了つた、鳴いたのは水鳥かしら、  
硝子を透してごらん、小さな赤い燈が  
ゆつくと滑つてゆく、河上の方に  
紀州の蜜柑でも積んで来たのかしら……  
何だか船から喚んでるやうな……  
ひつそりとしたではないか、



もう一度、その薄い硝子からのぞいて御覽、  
恐らく紺いろになつた空の下から、

遠見の屋根が書割のやうに

白く青く光つて

疲れた千鳥が静な水面に鳴いてる筈だ。

サラリとその硝子を開けて御覽……

スツカリ雪はやんで

星が出た、まあ何て綺麗だらうねえ、

あれ御覽、真白だ、真白だ。

まるでクリスマスの精霊のやうに、

ほんとに真白だねい。

四十四年十一月

## 冬の夜の物語

女はやはらかにうちうなづき、

男の物語のかたはしをだに聴き逃さじとする  
に似たり。

外面にはふる雪のなにごともなく、

水仙のバツチリとして匂へるに薄荷酒青く揺  
げり。

男は世にもまめやかに、心やさしくて、

かなしき女の身の上になにくれとなき温情を

寄するに似たり。

すべて、みな、ひとときのいつはりとは知れど、

互みになつかしくよりそひて、

ふる雪の幽かなるけはひにも涙ぐむ。

女はやはらかにうちうなづき、

湯沸のおもひを傾けて熱き熱き珈琲を搔きた  
つれば、

男はまた手をのべてそを受けんとす。

あたたかき暖爐はしばし息をひそめ、  
ふる雪のつかれはほのかにも雨をさそひぬ。

遠き遠き漏電と夜の月光。

四十四年一月

### キヤベツ畑の雨

冷<sup>ひま</sup>びえと雨が、さ霧<sup>きり</sup>にふりつづく、  
キヤベツのうへに、葉のうへに、  
雨はふる、冬のはじめの乳緑の  
キヤベツの列<sup>れい</sup>に葉の列に。

あまつさへ、柵の網目の鐵<sup>てつ</sup>條<sup>じょう</sup>に  
白い鳥<sup>とり</sup>奴<sup>め</sup>が鳴いてゐる。

雨はふる、くぐりぬけてはいきいきと、  
色と匂を嗅ぎまはる。

ささやかな水のながれは北へゆく。

キヤベツのそばを、葉のしたを、

雨はふる路もひとすぢ、川下の

街も新らし、石の橋。

キヤベツ畑のあちこちに

かがみ、はたらき、ひとかかえ

野菜かついではしるひと、

雨はふる。けふもあをあを夏帽子。

小父さんが来る、眞蒼に、脚も顫へて、

お早うがんです。山楂子の芽もこわごと

泥にまみる。立ちばなし。

雨はふる。しつかと握る水薬の黄色の罫の鮮やかさ。

阿魔つ子がね昨夜さ、

いいらぶつ吃驚げた真似仕出かし申してのお  
前さま。

雨はふる。光つては消ゆる。剃刀で  
咽喉を突いた女の頬。

「だけんどごうかかうか生きるだらうつて、  
醫者ごんも云やんしたから。」まづは安心と軍  
鶏屋の小父さん  
胸をさすればキャベツまで  
ほつと息する葉の光。

鳥が鳴いてる……冬もはじめて眞實に  
雨のキャベツによみがへる。  
濡れにぞ濡れて、眞實に  
色も匂もよみがへる。

新らしい、しかし、冷たい朝の雨、  
キャベツ畑の葉の光。  
雨はふる。生きて滴る乳緑の  
キャベツの涙、葉のにほひ。

四十四年一月

## 蕨

春と夏とのさかひめに  
 生絹なまぬいめかしてふる雨は  
 それは「四月」のしのびあし、  
 過ぎて消えゆく日のうれひ。

蕨の青さ、つつましさ、  
 花か、巻葉か、知らねども、

その芽の黄きさ、新らしさ……  
 庭の井戸から水揚げて、  
 しみじみと撰える手のさばき、  
 見るもさみしや、ふる雨に。

ひごりは庭のかたすみに、  
 印半纏いんはんぢん着てかがみ、  
 ひごりはほそき角柱かくばしら、  
 しんぞ寥さびしう手をあてて、  
 朝のつかれの身をもたす

## 古い宿場の青樓。

しとしとしとふる雨に  
柱時計の羅馬字も  
蓋も冷たし、しらじらと  
針のIXを差すその面。

ひごりはさらに水あげて、  
さつと蕨の芽にそそぎ、  
ひごりはじつと眼をふせて、

揚枝つかへり弊私的里の  
朝のつかれの身だしなみ。

空と海との燻し銀、  
けふの曇りにふる雨は  
それは涙のしのびあし、  
青い臺場の草の芽に  
沁みて「四月」も消えゆくや、  
帆かけた船も、白鷺も  
ましてさみしやふる雨に。

もののははれにふる雨は、  
さもこそあれや、早蕨わらびの  
その芽に莖に渦巻きて  
はやも五月しは沁むものを  
なにかさみしきそのおもひ。

春と夏のさかひめに  
生絹なまごめかしてふる雨は  
それは四月しのしのびあし、

過ぎて消えゆく日のうれひ。

四十四年四月



## 涙

蒼ざめはてたわがこころ、

こころの陰かげのひとすぢの

神経の絃いぢそのうへに、

薄明ツワイライトのその絃いぢに、

薄明ツワイライトのその絃いぢに、

ちらと光りて薄青く、

踊るものあり、豆のごと……

雨は涙とふりしきる。

見れば小さな緑玉エメラルド、

ひとのすがたのびいごろの、

頬にも胸にもふりしきる、

涙……かなしいその眼つき。

聲もえたてぬ奇あやしさは

夜半よなに「秘密」の抜けいでて、

所作しよさになげくや、ただひとり、  
 パントマイムの涙雨。

月の出しほの片あかり、  
 薄き足もつびいごろの、  
 肩に光れどさめざめど、  
 歎き恐れて、夜も寝ねす。

金のピアノの鳴るままに、  
 濡れにぞ濡るれすべもなく、

神経の上、絃いづのうへ、  
 雨は涙とふりしきる。

四十四年十月

新 生

新らしい眞黄色な光が、  
 濕つた灰色の空——雲——腐れかかつた  
 暗い土藏の二階の窓に、  
 出窓の白いフリジアに、髓の髓まで  
 くわつと照る、照りかへす。眞黄な光。

眞黄色だ眞黄色だ、電線から

忍びがへしから、庭木から、倉の鉢まきから、  
 雨滴が、憂鬱が、眞黄に光る。  
 黒猫がゆく、  
 屋根の廂の日光のイルミネエション。  
 ぼたぼたと塗りつける雨、  
 神経に塗りつける雨、  
 靈魂の底の底まで沁みこむ雨  
 雨あがりの日光の  
 鬱悶の火花。

真黄だ……真黄な音楽が

狂犬のやうに空をゆく、と同時に

俺は思はず飛びあがつた、驚異と歡喜に

野蠻人のやうに聲をあげて

匍ひまはつた……真黄色な灰色の室を。

女には兒がある。俺には俺の

苦しい矜がある、藝術がある、而して欲があり熱  
愛がある。

古い土藏の密室には

塗りつぶした裸像がある、妄想と罪惡と

すべてすべて真黄色だ。

心臓をつかんで投げ出したい。

雨が霽れた。

新らしい再生の火花が、

重い灰色から變つた。

女は無事に歸つた。

ぼたぼたと雨だれが俺の涙が、

真黄色に真黄色に、  
髓の髓から渦まく、狂犬のやうに  
燃えかがやく

午後五時半。

夜に入る前一時間。

何處どこで投げつけるやうな

あかんぼの聲がする。

四十四年十月

四十四年の春から秋にかけて自分の間借りして居た

旅館の一室は古い土蔵の二階であるが、元は待合の  
密室で壁一面に春畫を描いてあつたそうなる、それを  
塗りつぶしてはあつたが少しつつくづれかかつてゐ  
た。もう土蔵全體が古びて雨の日や地震の時の危ふ  
はこの上もなかつた

## 黄色い春

黄色、黄色、意氣で、高尙で、しとやかな

棕櫚の花いろ、卵いろ、

たんぼぼのいろ、

または兒猫の眼の黄いろ……

みんな寂しい手ざはりの、岸の柳の芽の黄いろ、

夕日黄いろく、粉が黄いろくふる中に、

小鳥が一羽鳴いゐる。

人が三人泣いてゐる。

けふもけふとて紅つけてさんぼがへりをする

男、

三味線弾きのちび男、

俄盲目のものもらひ。

街の四辻、古い煉瓦に日があたり、

窓の日覆に日があたり、

粉屋の前の腰掛に疲れ心の日があたる、

ちいちいほろりと鳥が鳴く。

空に黄色い雲が浮く、  
黄いろ、黄いろ、いつかゆめ見た風も吹く。

道化男がいふことに

「もしもし淑女、どんぼがへりを致しませう、  
美しいオフエリヤ様、

サロメ様、

フランチエスカのお姫様。」

白い眼をしたちび男、

「二寸、先生、心意氣でもうたひやせう」

俄にわか盲目めくらも後うしろから

「旦那様や奥様、あはれな片輪で御座います、  
どうぞ一文。」

春はうれしと鳥も鳴く。

夫人、

美しくしい、かはいい、しとやかな

よその夫人、

御覽なさい、あれ、あの柳にも、サンシユユにも  
黄色い木の芽の粉が煙り、

ふんわりと沁む地のにほひ。  
ちいちいほろりと鳥も鳴く、  
空に黄色い雲も浮く。

夫人。

美<sup>み</sup>くしい、か<sup>か</sup>はいい、し<sup>し</sup>とやかな  
よその夫人、  
それではね、そつとこ<sup>こ</sup>こ<sup>こ</sup>らでわかれませう、  
いく<sup>い</sup>く<sup>く</sup>ら行<sup>い</sup>つてもねえ。

黄色、黄色、意氣で高尙<sup>かうじやう</sup>で、しとやかな、  
茴香<sup>ういきやう</sup>のいろ、卵<sup>たまご</sup>いろ、

「思<sup>おも</sup>ひ出<sup>で</sup>」のいろ、  
好きな兒猫<sup>こねこ</sup>の眼<sup>まなこ</sup>の黄いろ、  
浮雲<sup>うきぐも</sup>のいろ、  
ほんにゆかしい三味線<sup>さんまいせん</sup>の、  
ゆめの、夕日<sup>ゆふひ</sup>の、音<sup>ね</sup>の黄色。

四十五年三月



汽車はゆくゆく

汽車はゆくゆく、二人を載せて、  
 空のはてまでひとすぢに。  
 今日(けふ)は四月(しがつ)の日曜(にちよう)の、あひびき日(ひ)和(わ)、日向(ひなた)雨(あめ)、  
 塵(ちり)にまみれた櫻(さくら)さへ、電線(でんせん)にさへ、路次(ろじ)にさへ、  
 微風(そよかぜ)が吹(ふ)く日(ひ)があたる。  
 街(まち)の瓦(わ)を瞰(み)下(くだ)ろせばたんぼぼが咲(さ)く、鳩(鳩)が飛(と)ぶ、  
 煙(けむり)があがる、くわんしやんと暗(くら)い工場(こうじょう)の槌(つづみ)が鳴(な)る

る

なかにをかしたな小屋(こや)がけの  
 によつきりとした野呂(のろ)間顔(まがほ)。

青(あお)い布(ぬ)かけ、すつぽりと、よその屋根(やね)からにゆつ

と出て

兩手(りやうて)つん出す彌次郎(やじらう)兵衛姿(べいゑすがた)、

あれわいさの、ごつこいしよの、堀拔(ほりひ)け工事(こうじ)の木遣(きぢ)の車(くるま)、

手をふる、手をふる、首(くび)をふる――  
 わしとそなたは何處(どこ)までも。

汽車はゆくゆく、二人を乗せて  
都はづれをひとすぢに。

鳥が鳴くのか、一寸と出た龜井戸驛の驛長も

芝居がかりに戸口からなにか恍然もの案じ、

柵に載つけたシネリヤ、

紫の花、鉢の花、色は日向に陰影を増す。

悪戯者の兒守さへ、けふは下から眞面目顔、

ふたつ並べたその鼻の孔に、眇眼に、まだ齒も生

えぬ

ただ揉みくちやの泣面のべそかき小僧が口の

中

蒸氣噴きつけ、驀進、パテ―會社の映畫の中の

汽車はゆくゆく、――空飛ぶ鳥の

わしこそなたは何處までも。

汽車はゆくゆく、二人を乗せて、

廣い野原をひとすぢに。

ひとりそはそは、くるりくるりくる、水車

廻る畑のごぶごぶに、

葱のあたまがとんぼがへりて泳ぎゆく、  
 ちびの菜種の真黄いろ  
 堀に曳きする肥舟の重い小腹にすられゆく。  
 さても笑止や、垣根のそとで  
 障子張るひと、椿の花が上に真赤に輝けば  
 張られた障子もくわつと照る、  
 烏勘左衛門、烏啼かせてくわつと吹く  
 よかよか飴屋のちやるめらも  
 みんなよしよし、粉囊やつこらさと擔いで、  
 禿げた粉屋も飛んでゆく。

蒸氣噴き噴き、斜に

汽車はゆくゆく………椿が光る。  
 わしこそなたは何處までも。

汽車はゆくゆく二人を乗せて  
 空のはてまでひとすちに。  
 硝子窓から微風入れて、  
 煙草吹かして、夕日を入れて、  
 知らぬ顔して、さしむかひ、――  
 下ぢや、ちよいと出す足のさき

ついで外<sup>そと</sup>せばきゆつと踏む、  
 雲のためいき、白帆のといき  
 河が見えます、市川が。  
 汽車はゆくゆく、空飛ぶ鳥の  
 わしこそなたは何處までも。

四十五年四月

## 梨の畑

あまり花の白さに  
 ちよつと接吻<sup>きず</sup>をして見たらば、  
 梨の木の下に人がゐて、  
 こちら見<sup>み</sup>ては笑うた。  
 梨の木の毛蟲を  
 竹ぎれてつつき落し、  
 つつき落し、

のんびり持った喇叭で  
 受けて廻つては笑うた、  
 しよざいなやの、  
 梨の木の畑の  
 毛蟲探のその子。

＊紙製の喇叭見たやうなもの

四十五年四月

## 河岸の雨

雨がふる、緑いろに、銀いろに、さうして薔薇いろ  
 に、薄黄に、

絹糸のやうな雨がふる、  
 うつくしい晩ではないか、濡れに濡れた薄あか  
 りの中に、

雨がふる、鐵橋に、町の燈火に、水面に、河岸の柳に。

雨がふる、啜泣きのやうに澄みきつた四月の雨  
が

二人のところにふりしきる。

お泣きでない、泣いたつておつかない、

白い日傘でもおさし、綺麗に雨がふる、寂しい雨  
が。

雨がふる、憎くらしい憎くらしい、冷たい雨が、  
水面に空にふりそそぐ、まるで汝の神経のやう  
に。

薄情なら薄情におし、薄い空氣草履の爪先に、  
雨がふる、いつそ殺してしまひたいほど憎くら  
しい汝の髪の毛に。

雨がふる、誰も知らぬ二人の美くしい秘密に  
隙間もなく悲しい雨がふりしきる。  
一寸おきき、何處かで千鳥が鳴く、歌私的里の靈、  
濡れに濡れた薄あかりの新内。

雨がふる、しみじみとふる雨にうれ連れて、雨が、

二人のところが啜泣く、三味線のやうに、  
死にたいつていふの、ほんとにさうならひそり  
でお死に、

およしな、そんな氣まぐれな、嘘つばちは。私は  
いやだ。

雨がふる、緑いろに、銀いろに、さうして薔薇色に、  
薄黄に、

冷たい理性の小雨がふりしきる。  
お泣きでない、泣きたつておつつかない、

どうせ薄情な私たちだ、絹糸のやうな雨がふる。

四十五年五月

## そなた待つ間

チヨンキナ、チヨンキナ、

チヨンキナ踊を、

けふの踊をひとをどり。

そなた待つとて、いそいそと、岡を上のぼれば日が廻まる、

雲も草木もうつとりと、

それかあらぬか、わがこころ圓まるい真赤まっかな日が廻まる。

チヨンキナ、チヨンキナ、

チヨンキナ踊を、

岡の草木がひとをどり。

そなた待つとて、ビンのさき池に落せばくるくると、

生きて駆けゆく水すまし、



それかあらぬか、投げ棄てたマニラ煙草の粉の  
光。

チヨンキナ、チヨンキナ、

チヨンキナ踊を、

池の面おもてがひとをどり。

そなた待つとて、夏帽子投げて坐れば野が光る  
ほけた鶯すみればな、

それかあらぬかたんぼか、羽蟻飛ぶ飛ぶ、野が

光る。

チヨンキナ、キヨンキナ、

チヨンキナ踊を、

楡ハナの羽蟻がひとをどり。

そなた待つとて、そはそはと風も吹く吹く、氣も  
廻る。

空に眞赤な日も廻る。

それかあらぬか、足音か、胸もそはそは氣も廻る。

チヨンキナ、チヨンキナ、  
チヨンキナ踊を、

白い日傘がひとをどり。

\*チヨンキナの繰返しはやはりチヨンキナの囃子にて歌ふ。

四十五年五月

## 薄荷酒

「思ひ出」の頁（ページ）に

さかづきひとつうつして、

ちらちらと、こまごまと、

薄荷酒を注つげば、

縁はゆれて、かげのかげ、仄かなわが詩に啜り泣  
く、

そなたのこころ、薄荷ざけ。

思ふ子の額ひたなに

さかづきそつと透かして、

ほれぼれと、ちらちらと、

薄荷酒をのめば、

緑は沁しみて、ゆめのゆめ、黒いその眸めに、睨り泣く、

わたしのころ、薄荷ざけ。

四十五年四月

## 白い月

わがかなしきソフイーに。

白い月が出た、ソフイー。

出て御覽、ソフイー。

勿な忽な草ぐさのやうな

あれあの青い空に、ソフイー。

まあ、何なんんて冷ひやつこい

風かぜだらうねえ、

出て御覽、ソフイー！

綺麗だよ、ソフイー！

いま、やつと雨がはれた――

緑いろの廣い野原に、

露がきらきらたまつて、

日が薄うすすりと光つてゆく、ソフイー！

さうして電話線の上にね、ソフイー！

びしよ濡れになつた白い小鳥が

まるで三味線のこまのやうに留つて、

つくねんと眺めてゐる、ソフイー！

どうしてあんなに泣いたの、ソフイー！

細こまかな雨までが、まだ、

新内のやうにきこえる、ソフイー！

――あの涼しい楡の新芽を御覽。

空いろのあをいそらに、

白い月が出た、ソフイー。  
 生きのこつた心中の  
 ちやうど、片われでもあるやうに。

四十五年四月

### 芥子の葉

芥子は芥子ゆゑ香もさびし。  
 ひとが泣かうと、泣くまいと  
 なんのその葉が知るものぞ。

ひとはひとゆる身ほそる、  
 芥子がちらふとちるまいと、  
 なんのこの身が知るものぞ。

わたしはわたし、  
芥子は芥子、  
なんのゆかりもないものを。

四十五年五月

目次

東京夜曲

公園の薄暮	九
鶯の歌	一三
夜の官能	一六
片戀	二一
露臺	二二

S 組合の白痴

雑草園……………二七

瞰望……………三五

心とその周圍

  I 窓の外二章……………四三

  II S 組合の白痴……………四九

  III 泣きごゑ……………五六

  IV 銀色の背景……………五九

  V 神経の凝視……………六二

青い髻

物理學校裏……………六七

骨なし兒と里猫……………七五

雪ふる夜のこころもち……………八一

解雪……………八九

  青い髻……………九五

  五月……………一〇二

  銀座花壇……………一〇五

  六月……………一〇九

新聞紙……………一一二

畜生……………一一六

隣人……………一二〇

雨の氣まぐれ……………一二六

葱の畑……………一三六

八月のあひびき……………一四一

秋……………一四三

槍 持……………一四九

おかる勘平……………一四九

雪の日……………一五四

種蒔き……………一五八

忠彌……………一六五

歌うたひ……………一六八

槍持……………一六九

CHONKINA……………一七五

鬼百合……………一八四

道化もの……………一九〇

あそびめ……………一九五

南京さん……………一九七



蝮捕り……………一九九

雪ご花火

夜ふる雪……………二〇七  
 柳の左和利……………二一一  
 春の鳥……………二一四  
 かるい背廣を……………二一五  
 薄あかり……………二一六  
 金と青との……………二二〇  
 雨あがり……………二二一

水盤……………二二三  
 心中……………二二七  
 花火……………二三一  
 放埒……………二三五  
 紫陽花……………二三八  
 カナリヤ……………二四二  
 彼岸花……………二四四  
 もしやさうでは……………二四七  
 片足……………二四九  
 あらせいとう……………二五一

あかい夕日に……………二五三

銀座の雨

銀座の雨……………二五七

雪……………二六四

冬の夜の物語……………二七二

キャベツ畑の雨……………二七五

蕨……………二八〇

涙……………二八六

新生……………二九〇

黄色い春……………二九六

汽車はゆくゆく……………三〇二

梨の畑……………三〇九

河岸の雨……………三一〇

そなた待つ間……………三一六

薄荷酒……………三二一

白い月……………三二三

芥子の葉……………三二七

挿畫「初夏の遊樂」……………木下奎太郎氏

## 餘言

本集名づけて東京景物詩と呼べども、その實は「邪宗門」以後に於けるわが種々雑多の異風の綜合詩集にして、輯むるに殆ど何等の統一なし。ただ何れもわがひと頃の都會趣味をその怪しき主調とせるは興趣相同じ。作品の多數は四十三年「PAN」の盛時に成れるものの如く、且つ又邪宗門系の象徴詩より一轉して俗謠の新體を創めたるも概ねその前後なり。なほ最近大正の所作はこれに加へず。此集もと昨春或はその前年末にも公にすべかりしも、人生災禍多く些か

上梓の時機遅れたるを憾みとす。

東京、東京、その名の何すればしかく哀しく美しくしきや。われら今高華なる都會の喧騒より逃れて漸く田園の風光に就く、やさしき粗野と原始的單純はわが前にあり、新生來らんとす。顧みて今復東京のために更に哀別の涙をそそぐ。

大正二年初夏

相州三崎にて

著者識

東京景物詩 をわり

大正二年六月廿八日印刷  
大正二年七月一日發行 正價金壹圓

著者 北原白

發行者 西村寅次郎

印刷者 佐藤保太郎

發行所 東京市日本橋區檜物町九番地  
電話本局一八七一 振替東京五六二四  
東雲書店

版權所有



